

第五章
付
編

史料解説

1、石田松太郎手記

いわゆる「石田松太郎手記」は、石田松太郎が古老から聞いた話も含め、明治初年から太平洋戦争にいたる時期の城崎町内の様子・できごとを中心に綴った、全一冊の回想録である。

石田松太郎 松太郎は城崎町湯島の有力旅館の一つ、まんだらやのあるじで、城崎町長も勤めた人物で
と曼陀羅屋 ある。松太郎の四男、石田弘氏の推定によれば、この手記は松太郎が昭和十五年頃から草

稿にとりかかり、昭和十七年頃に一応完成させた原稿に、太平洋戦争の敗戦後若干の加筆訂正を行ったものであるという。

石田松太郎は、明治二十四年一月二日、曼陀羅屋（その五、六年後よりまんだらやと改称）を経営する石田栄助・きぬ夫妻の三男（末子）として生れた。城崎尋常小学校四年・同高等小学校四年を卒業した後、豊岡中学校に入学する。しかしすでに死去していた父につづいて長兄禎蔵（襲名して勘九郎）が日露戦争で戦死すると、次兄卷之助が母の実家に養子に行っていた関係上、松太郎が後を継ぐことになり、豊岡中学校を二年で中退して家業に携わることとなった。

城崎には三軒衆とよばれる最有力旅館とうや・西村屋・三木屋があるが、それに次ぐ有力旅館の主人として、松太郎は大正十年四月、満三十歳で城崎町会議員に当選したのを端緒に、町政に深く関わってゆ

く。町議にはその後、昭和四年、八年、十二年と連続して当選し、城崎温泉を管理する湯島区会議員にも大正十一年以降当選を重ねた。また昭和十一年八月二十一日から十五年八月二十日までと、十五年十月二十一日から十八年三月十三日まででは城崎町長として町政の中枢に位置した。

城崎町で昭和二年以降内湯設置の可否やそのやり方をめぐって内湯問題が起こったとき、松太郎は内湯反対派の中心人物として活動した。この活動を通じて、彼は町長に就任するほどの政治的実力を持つようになったのであった（『城崎町史』本文編七三―七四六頁）。松太郎は戦後は町政の第一線から退き、昭和三十三年十二月十八日に死去した。

石田松太郎 「石田松太郎手記」は石田家やまんだらやのこのみならず城崎町域を中心とした政治・手記 記 経済・社会風俗などの幅広い見聞を記したものである。松太郎の町政における重要な位置

や、三国史などを愛読する歴史への深い関心、几張面な性格を反映しており、『城崎町史』本文編の記述においても大いに参考になった。全一一巻の各巻の表題を列記すれば、第一巻・我国体と城崎温泉、第二巻・年中行事、第三巻・日露戦争後の城崎、第四巻・曼陀羅屋、第五巻・父母兄妹、第六巻・茅葺の巻、第七巻・新興の巻、第八巻・地震の巻、第九巻・町の復興のことも、第十巻・我が家の復興、第十一巻・公人である。手記は各巻とも、一二行の曼陀羅屋の名入りの罫紙数十枚に、毛筆で記されている。『史料篇』では枚数の制約上、歴大な手記の全部を掲載することはむずかしいので、本文編において重要でありながら十分に触れることができなかつた叙述を補う意味で、第二巻・年中行事と、第八巻・地震の巻をほぼ全文載せる。第二巻には、当時の町民の生活に密着した行事であったにもかかわらず今となってはその三〇〜四〇%がすでに忘れ去られているという町内の年中行事の他、様々な社会風俗が生き生きと描か

れている。第八巻は、北但大震災の貴重な史料である。なお、史料に適宜句読点を施した。

(伊藤之雄)

2、浴場と旅館の変遷

付編第二節は、古来、外湯を中心として発達してきた城崎温泉構成の柱として、その浴場（外湯）と湯宿（旅館）および浴客の扱い方（旅館規約）の変遷を、当地発行の案内書その他の諸記録によって年代順にしめして、当温泉発展の跡を裏付けようとしたものである。

湯槽と旅館 明治以降の温泉管理当局（初めは温泉事務所名、後には町役場名）発行の案内書によって規定の推移 記述した（温泉管理の詳細は『城崎町史』付編第一章参照）。

1項については、各外湯の浴槽の数と規模および設備について発展の跡をしめした。案内書によっては、外湯それぞれの沿革・薬効等を記したものもあり、昭和期になると、湯治場から観光地化への変遷に際して、温泉そのものよりも名所や遊覧個所の案内が主となってきた。なお、ちなみに明治期の案内誌（記）の原文は、町出身で文章家として知られた三宅竹隠（初期）、結城蕃堂（後期）の手になるものである。

2項の旅館規約とは、湯宿仲間の協定事項（宿泊・賄いの方法、入浴の等級、客の案内・送迎など）で、一見統制的に見えるが、自らを守り共存共栄をはかろうとするものである。その宿泊（賄い）方法の推移を見ると、明治期には湯治型の炊出制（たきだ）であったものが、大正期に入ると短期滞在型の旅籠制（はたご）が主となっていく過程が分る。

昭和期になるといわゆる内湯問題が起つて、旅館だけでなく全町を二分する紛争が二十年余りつづいた。その間、旅館規約どころではなかったが、戦後しばらくして外湯内湯併立主義の形で円満解決して今日におよんでいる。畢竟古来の共存共栄の理念によるものといえる。その経緯については『城崎町史』（本編第四章第四節と付編第一章第二・三節）に詳述している。

旅館の数と 旅館数の史料は、同一の目的・基準で調べたものでないので、掲載数は必ずしも実数をし名称の変遷 めしていない。史料番号（一八、二一、二二）は営業案内書の広告に所載されたもので、

実数とはかなりの差があると思われる（ともに載っている商店名も参考の為掲載した）。（二〇）の「修進社加盟旅館」は、添書に「他に不都合の行為ありて除名二軒、木賃宿・車夫宿八、九軒有之も省略」とある。その他の七番（一七、一九、二四、二五、二六、二七、二八）についてはほぼ実数をしめしている（若しくは近い）といつてよい。

なお、（二三）「大正十三年頃」と（二四）「昭和六年」とは、大正十四年の北但震災前後の記録として注目を要する。

（萩原 一郎）

3、城崎町の石造遺物

石造遺物はそのほとんどが宗教、とくに庶民の仏教信仰にかかわるもので、仏教的文言のない道標にしても旅人と施主が同行二人、仏の道を正しく歩むための指標という意味を持ち、単なる交通標識ではない。町内の石造遺物中多くのものが、したがって間接的にしる温泉寺と結びつくのは当然である。

大師山に連なる四国八十八カ所石塔群は文化十一年（一八一四）の発願で、化政期にいたって全国的に行きわたったものの一つながら、その後幕末期に数次にわたって追加補充されたもののようにある。江戸時代の庶民の旅行は、本音が遊山であっても建前は神社詣か湯治でなければならなかった。湯島行きの際は湯治を第一とし、温泉寺詣と簡易な四国八十八カ所巡礼を第二として、石山（玄武洞）・二見浦・日和山（東山・瀬戸）遊山と本音の部分で結びついたのである。

弁天山と桃島の宝篋印塔はともに応安年間の年紀銘を持ち、基礎後面は格狭間を刻まずに銘文を入れている点が但馬内では特異のもので、同一石工の手になる可能性があり、弁天山の例にも桃島と同様の基盤があつたと思われる。

来日の寛永十三年（一六三六）の読誦塔（3）——1は江戸時代に入ると消滅の途を辿る逆修塔の数少ない一例と云える。

二見の天神社のアミダ浮彫板碑（6）——1は応永期の年紀を持ち、中世年紀銘入り石造遺物の一つとして貴重なものであるが、同時期・同一人の手になると思われるものが豊岡市の勝妙寺にある。上山と簸礮の二十三夜塔は但馬内ではここだけのもので、民俗学的な興味の対象となろう。

全体として見ると道標が少ないが、周辺地域の道標に「湯島道」をしめすものが多いことも分かるように、湯島が旅の道程ではなく目的地であることから来る当然の帰結であろう。（山口 久喜）

4、麦わら細工の製法

この節は、当地古来の特産として高い評価を得てきた「麦わら細工」について、技術者によってその製法と製品の概要を記録したものである。(その起原・沿革については、『城崎町史』付編第三章に詳述)。

特殊な伝統的民芸品として、その製法技能は町の文化財に指定されて(平成元年)、振興発展に努めているが、現況は後継者の育成と原材料の確保ともに懸念すべき状態にあるというべきである。そうしたことから、現在の製法を史料として遺すとともに、町民の関心と認識を高めようとするものである。

(萩原一郎)

第一節 石田松太郎手記

一、第二卷 年中行事

参考にもなると思つて甚冗長に流れるが、当時及其后に於ける年中行事を出来る丈け詳細に記して見よう。

(イ)元日

未明に起きて心身を清め一家揃つて氏神様に参詣し、末社及各自の崇敬する神様やお寺に詣り、帰つて拙宅の神様仏壇に拝礼し、其后に家族召使お互に新年の挨拶をとりかはし、今日丈は高膳に新しい箸が添へられて雑煮を祝ふを例とした。

他家では屠蘇を祝はる、が拙宅は下戸揃ひであつたから屠蘇は祝はれなかつた。終つて客人の所に一々新年の挨拶を述べ、今日は屠蘇及び雑煮、正月煮メなどを差上げた。

町の名譽職の人、生徒などは学校の拝賀式に参列し

たが、一般の人は湯島全戸に亘つて一々年賀の挨拶に廻り、主婦は家にあつて其礼をうけた。下層階級の家は門口に立つて礼をうけ、相当の家では台所で挨拶の礼をうけ、初めて新年を迎へる新嫁のある家は母親が嫁を同席させて廻礼者に紹介して此後の交誼をお願いした。

全戸は国旗を揚げ門松七五三繩を飾ること今日と變りなく、折には万才も来て新春を寿ぐ気分は全町に鬨として漂うてゐた。然し明治四十二年汽車が開通してから、元日早々から早い客人は年を起す客も俄に激増して多忙を極めるやうになつて、戸毎の回礼は廃止することになり、小学校に一同集まつて拝賀式に参列し、式終つてから神酒を頂き互いに新年の挨拶を取かはすことに改まり、尚終戦後は御真影が撤廃されたから学校に集まることも廃止せらる、やうになつたのである。

(ロ)七日正月

七草の粥を祝ひ好みに依つては正月の三ヶ日も此日

も善哉ツギヤを雑煮ツギヤを祝ふ家もある。

門松や主連飾は上部は薬師殿で、中部は四所神社の境内で、下部は弁天山の山麓で、ドント（左義長または散鬼杖）と称して火を炊き之にくべ、子供達は二日の書初の紙を燃して、其灰が高く上昇すれば字が上手になると噂しあつた。

(ハ) 初薬師講（八日）

正月八日宿屋業者は先づ薬師に参詣し、それより積雪を踏んで温泉寺に登り、本堂にて修行せらるゝ、報恩の読経の式に参列し、終れば寺より饗応せらるゝ、精進料理、特に納豆汁を賞味し、終日お薬師様の御恩沢を感謝して楽しく一日を過した。

此の日上、中、下の宿屋を三組に分け例講の講番を籤によつて定めた。例講とは五、八、九月の八日に薬師堂で修行され、終れば薬師庵で温泉支配人の手料理で昼飯を喫し楽しく一日を過した。例講の前日には支配人が米を一升、漬物、味噌等を各宿屋から集めて当日の料理の資とした。大正七年の水害で薬

師庵が倒潰してからは、一時金毘羅ツギヤ教会所を使用した。が正月客の多忙と積雪の折柄であり、且は栗林法印の徳の失墜から初薬師さゝ中止せらるゝ、やうになつたことは遺憾である。是非再興復活させたいものである。

(ニ) 節分会（二月三日）

俗に神様のお正月と称し各神社が祀れるのは元より、家々の神棚も飾られ鏡餅を供へ、一の暗みには年男が枱たいに炒大豆を入れ、家の各室に福は内鬼は外と高らかに唱へて豆を撒いて廻る。昔温泉寺では追儺ついで式の盛大な行事が行はれたとも言はれてゐるが、現今では特別取りたて、記すやうな行事は神社も寺院も行はれなかつた。各戸の入口や門扉等に柊、樅、榧等の葉と田作とを串にはさんで差す。これは鬼が眼をつくとか言はれて置おつたが、他にも理由があるのか。今日の夕飯の膳には柿、南京、枳餅、鱒などを添へ、諸病除け、蝮うしほに噛かまれぬ、呪まじなひとか言つて、今晚の為に右の品を苦心して保存されたものである。

夕飯が終ると玩具の大鼓、金盃、石油罐等思ひくゝの鳴物を叩き三々五々打連立って、「油虫送った丹後のかたに送った」と唄って町中を歩き廻った。中には「酒呑み送った」とか、「貧乏神送った」など、おどけて唄ふ者もあった。又媿と称して「本年は病気を止めるか」とか、病弱、悪癖のある者などの頭と足を両方から押へて問ふに對して、本人は「はい止めます」とか「丈夫になります」と答へると、悪癖は直り病氣は逃げてしまうと、ほん気で行はれた。又病氣のある者は其夜町の四つ辻に金銭、衣類、其他鍋取、鍋輪などを捨てられて、それを拾った者に自分の病氣が移って治る。油虫は其家に移ると言はれたから、親達は拾ってはならぬと子供に戒めたものだ。此夜神社と温泉寺にはお籠りする人が沢山あつて福引、賭博、囲碁、将棋に耽る人、浄瑠璃を語る人等々、そば、善哉、料理、酒などを取寄せる人などあつて夜を徹して賑はつた。

明くれば特に厄年の人は、石の鳥居を七つ潜れば厄

が払へると言はれて鳥居潜りが行はれた。酒屋では寒の水と称して一年中使用の水を吸み溜められたし、かき餅も前日頃一年中使用の分を搗いて保存されたが、何物でも腐敗せないのは不思議である。因に真宗では右のやうな諸行事は行はなかつた。

(ホ)初午祭

初午には色紙で作つた幟(のぼり)を奉納し、神社では小豆御飯の握り飯を用意して参詣人に与へた。拙宅の曼曼陀羅稻荷様は今の蒲団部屋(マツ)の付近にあつて、南向に建てられて居つたが、明治廿八年に再新築されて西向に改められた。祭日には曼陀羅町の県道から神社に至るまでの間、大幟が立てられ紅提灯が吊られ、社前には篝火を焚き祭太鼓が鳴らされた。且余興として毎年福引、素人浄瑠璃等の催しもあつて城崎では第一等の賑いを呈した。震災で社殿も、付近の樅、椎の大樹も焼失し、且敷地も区画整理により現在の位置に遷したのである。

拙宅の稻荷様に次いで堀端の清玉稻荷様(マツ)が盛大に祀

られた。此所でも余興によく素人淨瑠璃が催された。こゝでは七月八日に伏見より官位を請けた当日であるとして毎年祭礼が行はれた。

伏見から官位を請けた稲荷様は拙宅のと此所の二社だけである。四所神社の境内の稲荷様、弁天山の稲荷様は当日たゞ祭られると云ふ程度であり、学校上の若女郎稲荷様は存在も認められなかつた山裾の小祠であつたが、城崎ホテルが今の小学校の所に設立されてから、会社が今の所に建設したのである。若女郎様とは雅成親皇（皇）（豊岡市高屋に雅成親皇様の陵あり後鳥羽上皇の第四の皇子にして北条氏の為に但馬に流され給ふ）様にゆかりのある女が、はる／＼但馬に親皇様（皇）を慕つて来て松岡村にて入水し、其死体が城崎に流れついたのでお祭りしたと伝へられてゐる。其女の方は大変髪的美丽な人であつたから、髪が悪い女が此神様に御祈りすると髪が美しくなるとか、此神様にお願いと逢ひたい人に逢へるとか云ひ伝へられてゐて、其傍に稲荷の小祠が建つて

居たから若女郎稲荷と称せられ、恰も庇を借りて主家を取つた次第である。

城崎は早くから新暦を用い、神社のお祭りも一月延してそれを祭日としてゐるが、初午や金毘羅様のやうに他町村にもある神様は、他町に慣つてお祀りすることにしてゐる。

(へ)庚申（五月、七月、八月、十月、十二月の庚申）

今も同じく極楽寺で祀られ、庚申様毎に子供が多数参詣して本堂で暴れ、土方稲嶺及曾我蕭白の襖などを破損するのでよく叱られたものである。六軒町の山本忠七老人は柔順しくしたらお話をすると、毎庚申毎に子供に話をしてくれられた。

極楽寺本堂は明治四十四年烏が葬式後、墓場の線香を銜へてそれを本堂の茅葺屋根の中に匿したのが夜に入って火を發し、人々の發見と同時に火災は天に沖し僅に阿弥陀如来、前机、蕭白筆の袋戸棚、襖二枚、其他少数の物を取出した外は焼失した。土方稲嶺の龍、虎、豹、烏の一間襖、蕭白の人物の襖など

の名画の焼失したことは洵に惜しまれてならない。

烏有に帰したとは此火災より生れた言葉のやうではないか。以来相戒めて墓場の線香は紙を破ってバラ／＼に解くことにしてゐる。

(ト) 涅槃会 三月十五日 (旧二月十五日)

温泉寺や極楽寺で祀られたが温泉寺は不便であつたから、子供達は極楽寺にお参りするのを例とした。

寺では鼻糞団子と称する小さい切餅を子供達に与へらるるのである。

極楽寺の倉裡(倉)は現在のは田舎の部屋を買いとつて建設されたのであるが、明治四十年前の頃まであつた前の倉裡(倉)は正面に大玄関のある茅葺建であつて、本堂と共に尊嚴の感があつたが、今ではそれが失墜の感がある。鐘楼及釣鐘は明治二十二年の建立であるが、大東亜戦争中、鐘は応召といふ美名の下に供出されて、今の鐘は昭和二十四年当地出身の川崎利一、石田貞三氏等が寄付されたものである。庚申堂は昭和七年の建立、本堂は大正□年の再建にて、檀徒の

努力もさることながら、当時の住職長谷川和尚の全霊全魂を打込んだ苦心は大に顕彰すべきである。

(ハ) 極楽寺暇と岩見重太郎

講談師の話であるから真偽の程は保証の限りではないが、極楽寺境内庚申堂前松暇に於て武士が二人出遇つて暗中に於て試合したが、遂に勝負つかず双方刀をおさめて互に名乗り合つたが、一方は岩見重太郎であり一方は塙団右衛門であつた。お互に奇遇を喜び且重太郎の物語りを聞き、敵の捜索に助力する旨を誓つて団右衛門は城崎を去り、重太郎は宮津に赴いて敵に廻りあい天の橋立に於て本懐を遂げると云ふ筋書であつて、橋立では城崎の場面も絵葉(繪葉立)にして橋立の敵打の場面と共に販売して居つた。今手元にはないが保存して置けばと残念に思ふ。

又一説には岩見重太郎兼輔は城崎の湯治場に来て、日野屋藤兵衛といふ湯宿に泊つて丁度五日目であつた。当時豊臣の五奉行の一人にて天下に威を振(佐田)ふ山の城主石田治部少輔三成の家臣筒井藤一郎と言ふ

武士、これは名代の剣客にて城崎に滞在中、極楽寺に道場を設け毎日極楽寺に出張しては稽古をつけてゐた。或日重太郎は此道場に見物に出かけ武者窓から批評をしたことから門人達の怒にふれ、止むを得ず大勢を相手に鉄扇を以て一々打据へたが、筒井氏も人格のある武士であつたから、不札を謝し門人を戒めて親交を結んだ。尚入湯中の京都木綿問屋三島屋三郎兵衛の子息の危難を援ひし縁故により、後年大坂入城の折三島屋が金主となつて鎧、物の具等立派に調ふことが出来た。重太郎一日夢に丹后の国に罷り越せば敵の在所が知れると、温泉寺観音の御告げに従ひて勇躍城崎を出発、天の橋立に於て敵広瀬軍蔵、成瀬権蔵、大川八郎右衛門其他の者を伐つて父の仇を報じたとも講談本に載つてゐる。行事ではないが話の種に記して置く。

(リ)紀元節（二月十一日）スキー祭

小学校で三大節として拝賀式があつて生徒や名誉職員が参列するに止まつたが、震災後桃島にスキー場

が開設せられてから、此山に小祠を建設して神社を祀り同日には神官、町長、議員、スキー倶楽部の人達が参列して、祝詞の奏上、玉串の奉典があつて時には講師を招聘して盛大なるスキー大会を催した年もあつた。開設当時は未だスキーが一般には普及されてゐなかつたから、温泉場にしてかゝる便利なスキー場は他に類例がなかつたから城崎に於てまづスキーを覚へ上達すればスキーヤーとして、他の高山難所のスキー場に巣だつと云ふ風にて、沢山のスキーヤーを城崎にて養成したものである。

今や各地にスキー場が出来てスキー熱も盛んであるが、当時は非常に珍重されたものである。此計画立案者である当時の町長西村佐兵衛氏に敬意を表すると共に、之が開拓者であり宣伝指導の任に当られた谷垣義三氏に深甚なる敬意を表する次第である。

(ヌ)神武天皇祭（四月三日）東山公園

神武山に生徒一同先生に連れられて山頂で行はれる遙拝式に参列したこともある。このことは明治卅五

年頃で終った。

神武山の名は大和屋結城勘右衛門氏の主唱で此山頂に遙拝式が行はれるやうになつてから起つたのである。今の忠魂（魂屋カ）の所に老松があつて主連繩が張られ、神官の祝辞があつて町長、名譽職員、先生、生徒など遙に大和の畝傍の御陵に対し拝礼を行つたのである。尚東丘の中央雑木林を切り開いて、遙拝式場建設の爲土台石が敷かれてあつたが、遂に成功を見なかつた。此山四方の展望よく稀に見る景勝の地である。明治廿四年時の村長大津屋青山大之進氏は出入である児島竹藏氏（子）を招いて此山頂に料理店をして見ないかと勧説された。児島氏は此徳憑に忽ち奮いつて先づ道路を開き、桜楓樹を植へ料亭を建設した。以来隣丘の日和山と共に春の桜、夏の涼み、秋の紅葉を探る者絶えず、城崎の一名所となつたのである。然し山頂である不便より、日和山の料亭と共に次第に利用者の数を減じ建ち朽れのみ、顧みられぬやうになつた。

明治四十三年官有地であつた神武山が払い下げらるゝこととなつて、湯島区が拠金して法規によつて町の名義に登記せられたのである。町有になつた此山を東山公園と名づけ、東丘と共に開拓して今の公園が出来上つたのである。此開設に当り尺碎（尺）せられた橋本屋安田貞吉、桶庄河原庄三郎両氏に多大敬意を表する。かくて大正二年韓国皇太子李王世子殿下御来城に当り此の山に御案内する爲め愈々完成を見たのである。今太子御手植の松はすくすくとして成長してゐる。後年川惣西村喜七郎氏東丘に飯茶店を建設したこともあり、東端に奥広氏立派な茶寮を建設し、旭亭大将新藏氏之を譲りうけて料亭を經營したが、震災後此建物を新地に移してから、此山も寂漠（ぞびび）を感じるやうになり、今は却つて荒廢の度を増してゐる。昭和年間大朝、大毎城崎入湯団歓迎の爲、此山頂で大園遊会を開催したが、三年程して狹隘（せま）の爲瀬戸の日和山に移すこと、した。児島竹藏氏神武山開拓に当り多大の自費を以て経営

したが、湯島区が経営するに当り無償にて提供せし
為、時の町長は記念碑を建設することを約されたそ
うである。自分が当局の際、遺族の懇請により山麓
に小碑を建て、昔日の功績に酬ゆることとした。

(ル)彼岸会

春秋の彼岸会は各寺院でも夫々修行せらるゝが、別
けても眞宗は彼岸中説教僧などを招きて説教を一般
に聴聞させ、檀下の者は中日にはお齋（こむ）をお寺にて
頂くのである。一般の人は弁当を携へて四国山を一
周して一日を楽しんだ。心の清浄と心身の鍊成には
非常に有意義な一日であるが、次第に激しい世の中
になって今では登山も非常に減少したことは、又止
むを得ないことではあるが遺憾に感ずる次第である。

(オ)春陽の節句 (四月三日)

雛人形を祭り桃の花を生け草餅、柏餅、菱餅、白酒
などを供へること当節と変りはないが、初節句の家
は親戚知己近所の人達を招待して、盛大なる御祝の
宴を張つたものであるが、大正年間冠婚葬祭など華

美に流れないやうにと、生活改善の町是が制定せら
れてから萬事が簡素に行はるゝやうになつた。

ゆとうや西村六左衛門氏の局にたゝれる時は、何時
も之を提唱し指導せられたが自らも亦実践せられた。

ことに上流の者はとに角下流の者が華美贅沢に流
るゝのを戒める為に、自ら範を示される精神には何
時も大なる敬意を表するが、其規定を犯すのは何時
も下流であり、上流の簡素を攻撃するのも下流であ
つて、西村氏も親の心子知らずと痛嘆されたことであ
らう。

(ウ)養老会 (四月十五日)

六十九才を相伴と云い、七十才からが正客である。
此日は町を誉（ほ）げて敬老一色に塗りつぶされ、誠心誠
意老人を慰安歓待するのであるから、老人達にとつ
ては一年中で最も楽しい愉快な一日である。老人達は
今日の為にと衣服を新調し、他国にゐる者もわざ
／＼家族の家に戻つて出席する有様である。

以前は此日に滞在してゐる高齢の浴客も招待した事

もあつたが、正客との待遇に支障があり座席も狹隘であるので、単に餅とか饅頭に改めたこともあつたが昭和初年頃から中止すること、したが、浴客にも何等かの敬老の意を表したいものである。

当日歩行の自由な老人は組長やんの案内で会場に着かれると、町長、議員、役場吏員、婦人会、温泉支配人物出で歓迎し、酒間の幹旋は以上の町役員の手達や芸妓が之に当り、且城崎検番の奉仕で芸妓の手踊、幼年生の遊劇、素人二輪加、等々毎年趣向工夫をこらして観覧に供し、帰宅にあたっては人力車、後には自動車屋の奉仕で一々宅まで送り届けるのである。

今日は差別撤廃不礼講で、出入の老人が親方の旦那に酌をさせ給仕させるのであるから、非常なる愉越感を満喫するのである。今は階級の差別も非常に薄れたが、住時頭の上らなかつた庄屋に酌をさせ機嫌をとらせた其歓喜はどんなであつたであらう。

会場は元宿屋の座敷を以てあてたが温城館が出来て

からは其所で、公会堂が出来てからは公会堂を使用すること、なつた。此の費用は元、中の島の区有田地の年貢で賄はれたが、売却してからは区費（を脱か）以て当て、ゐる。湯島区の養老会は其歴史の古いこと、敬老精神の横溢していることは、他に其比を見ない所であつて城崎の大なる誇りの一つである。

本養老会は天明元年の創設に係り塩谷大四郎といふ久美浜の名代官が村民に説ひて之を創設せたと伝えられてゐるが、当時此名代官も亦臨席されて歓を尽されたことであらう。今日に至るまで開催を続けられた祖先々輩の諸氏に深甚なる敬意と感謝を表する次第である。当地に於ける勲一等に相当する無料入浴権が養老会員に与へられた。

(カ) 金毘羅祭 (旧四月、十月)

拙宅の突当りの山頂に古くから金毘羅さんの社があつてお祀りしてあつた。明治三十年過ぎの大雪に倒壊してから堂宇は再建されずにゐる。

薬師境内の金毘羅さんは明治卅年十月竹野の慈眼院

の住職永原有堯師が讚岐松尾寺の住職と師弟の関係から当町及び竹野の有志と計って、讚岐の御分霊を当町に勧請せられたものである。

最初は歓喜天の御堂に仮安置し、其前に二間に三、四間位の礼拝堂兼事務所様の物が建てられてあった。当時、今の教会所及参道の所には鶴鳴樓樋口鶴吉氏が温泉寺から土地を借入れて大弓揚弓場を建設して経営し、浴客誤樂(誤)の一名物と呼ばれてゐたが、金毘羅教会所の懇請によつて、未だ建設後幾年にもた、ない建物を取払つて、教会所の建設地に提供されたことは大に感服するところである。

金刀比羅宮は大物主命及崇徳帝を祭神とし、大権現は釈尊の信奉せられた神様を役の小角が松尾山に祭祀したが、明治に至つて本家分家の訴訟となつて長年月に亘つて財産の争があつたと聞くが、権現様には全国的に其争がある。それは兎も角として教会長は永原氏であつたが、教会の布教に努められた藤原基輔通称西山居士が幹事となり、当町の山田源兵衛、

久保田六三郎、鳥井与三郎、伊東佐太郎、浅野文蔵、月本徳平、川崎和八郎、日生下民二郎氏等世話人となつて、広く寄付金を募集して敷地を拡張し、明治卅三年十月十日に上棟式はしたものの、資金不足を告げて一同大に苦心慘憺されたものである。今の教会所がそれである。

本殿は明治卅七年の建立で春秋の祭礼には山門から福棒が撒かれて、優勝者には金の御幣に白米が一俵授与され、其他福引、角力、淨瑠璃などの余興もあつて、売店は橋より山門まで続き近郷の人も多数参詣して当町の大祭の一つに数へられて居つたが、世話人も相次いで死亡し、殊に船乗の信者が多数あつたが大船は全部皆滅(滅)した為、昔時の隆盛は見られないやうになつたのは神徳を以しても如何とも為し得ないところであらうか、遺憾に思ふ次第である。

(三)多聞天の頃省略

(夕)歓喜天

祭日は後先になるが隣接の神様であるから此所に記

す。歡喜天とは十一面觀世音が衆生齋度(註)の為、仮に歡喜天として姿を現はされたものと言はれて、十一面觀音のある所には大抵祀られてゐるのである。此歡喜天も元は温泉寺の別当であつた。今の温泉寺の庫裡である歡喜院の本尊であつたが、奥の院の本尊弘法大師作と伝へられてゐる千手觀音が歡喜院に移されてから鐘樓のあたりに祀られ、後に中性院の実雅法師が文化年間薬師堂の西北の小高い所に移し更に、たいやか井筒屋の主人が帰依されて、現在の場所に遷されたとか伝へられてゐる。祭礼は自分の覺へた頃からも余り盛大に行はれてゐなかつた。

(イ)開山忌 (四月二十四日)

往古は上人の御行衛を見失つた正月廿四日に大法会が修行せられたが、何年頃からであるか積雪の正月を變更して、花の旧三月廿四日に行はれるやうになり、新曆になつてから四月に行はれてゐる。

廿三、四日は並等湯は無料で開放し、全戸は国旗高張を掲げ幔幕を張り、上五町は各町内毎に県道を挾

んで両側に笹をたて(孟宗竹)、それに竿を渡して幕と提灯を吊り(これは上部の神様の祭り毎に使用した)、各戸も間口に応じて松の枝に紅提灯を吊り、全町は開山に対する報恩感謝の気分で充溢した。

廿三日は温泉寺で読経があげられ、廿四日は午前と午後と亘つて大盤(註)若経があげられ、当日は温泉寺の結宗僧十名程も参列されて崇厳な大法会が修行された。拙宅は開山道智上人とは因縁浅からざる關係により、毎年招待をうけて此法会に参列し昼食の饗応をうくる慣しである。

余興は其年々で色々と工夫発案されたが、其主なるものを挙げると、金毘羅山(註)から昼夜に亘つて打上げ花火を幾発となく掲げられた、城崎に古くからある地囃子が復活されて囃子方は屋台の中にて歩きながら町内を練り廻つた、温泉寺境内で宝探しが行はれた、温泉寺境内で素人の大角力を又は素人の二輪(註)加大芝居が催された、温泉寺多宝塔の前から境内の参詣人に多数の小餅が撒かれた、昼夜町内に幾組とな

く二輪加（一）を催した、区から審査員を選んで二輪加（二）に又或年は仮装行列に等級をつけて賞与を与へた、町内毎に催した作り物に等級をつけて夫々授賞した、料理屋組合が屋台を作り芸妓総出で囃子方踊方を組織して相当な家の前で手踊を催して町中を練り廻った、等々。

経費は区からの補助があり、其他有志金や温泉寺の膳料の収入等で賄はれたが、大正十二年頃龍照法印の発起で開山忌奉賛会が組織され、奉賛会役員が有志金を集めてから一層盛大に行はれるやうになつたが、温泉祭が挙行されるやうになつて此奉賛会も解散した。

廿四日当日は町長、町有力者、旅館業者等が温泉寺に招待をうけて、大法会に参列し昼食の饗応をうけたものであるが、年と共に列席者が減少するので中止されるやうになつた。それは戦争以前であつて葉師講と轍を同じくしてゐる。之は町民に信仰心の欠如せし為か。はた僧侶の徳の失墜せし為か。

尚開山忌及葉師祭には宿屋、同召使、浴客者からも膳料を集めて尊前にお供へすること、今日も同じであるが其数も昔とは非常に減少してゐる。

昭和十九年みなどや久保田順三氏と共に本尊様に供膳料として国債壹百円、自分一人で道智上人へ供膳料として国債壹百円寄付したが、当時の利札であつたら年々の供膳料に充分であつたが、貨幣価値の下つた現在ではもの、数でもなくなつてしまつた。余財があつたら奉獻したいものである。

此の年に久保田氏と共に極楽寺、蓮成寺に金貳百円づつ、四所神社、本住寺に金百円づつ、の公債を寄進した。拙宅では地神様、稲荷、愛宕様を立派にお祭りすることは元よりである。

(イ)温泉祭 (四月廿三日)

古来開山忌には四所神社も立派に祭られ、拙宅でも地神様の一ノ宮及稲荷、愛宕の三社も幕や提灯を吊り、御神餅を供へ道智上人御持仏の曼陀羅の御軸及曼陀羅記を宅にて祀るのを例とした。

然る処昭和八年の頃であつたか時の町長代理坂本誠一氏が、温泉祖神の御祭を挙行しようではないかと主唱し、一同も之に賛成して茲に温泉祭を挙行することになった。

廿三日午前十時四所神社で祭典を執行し、午後一時から御神木を先登に古代行列順序に依じて之に従ひ、町長、助役、名誉職員、氏子惣代が供奉し、今日は神官は馬に乗り、先づ曼陀羅湯より鴻湯、御所、一の湯それより南側を駅前に出で、地藏湯、柳湯の順序で各浴場にて出湯の弥栄を祈念し、神官、町長、支配人玉串を奉典した。

廿四日は開山忌にて午前十時駅前御浴案内所に集合し、稚児行列、温泉寺法印、温泉寺結宗寺院、城崎各宗寺院、町長、助役、各名誉職員、温泉寺檀徒惣代世話人等玄妙なる奏楽につれて徐々に進み、道々温泉寺法印は六湯の加持祈禱の式を行じつ、薬師に至り、午後一時より温泉寺に於て大法会が厳修せらるゝことに改められた。一方上、中を一組に南、北

側を各一組にして三組の屋台は、思い／＼に趣向をこらして囃子方は之に乗り踊子は綱を以て之を曳き、各町内有力者の前にて踊り二輪加（舞）を演じ、廿三廿四日の両日は厳肅崇嚴（正）なる御神木の渡御、寺院の祈禱、散華の行列と相交錯し、町の各戸は裝飾され、花火は絶へず大空にて炸烈し、其華美灼爛（舞）なること極彩色の絵巻物を見るやうであつた。

商工会は福引券を添へたる割引大売出を催し、十日位より全但の各駅にポスターを掲げ（舞）て此大祭を宣伝し、駅前、神社、寺院に無料休憩所を設けて湯茶の接待をする。軽業、のぞき、物売の野師仲間（舞）も多数来つて、此両日は全但より多数の参詣者も来つて、但馬の大祭に数へらるゝやうになつた。

又時勢の推移に従ひ角力・野球・ダンス・喉自慢・映画等を催すことも加へられた。

昭和九年鉄道省は全国の温泉名所、遊覧地に対し、四月十八日より廿四日の間を選びて観光祭を挙行して、観光によって享受する恩恵を感謝するやう指令

して来たが、何故に花の時期の終りたる右期日を指定したのか、恰も我町の温泉祭、開山忌が期日の同じきも不思議な因縁である。或は祖神、開山の靈位によるところか。

当町は温泉祭を以て観光祭にかゝる毎年執行するが、各地は一時観光祭を盛大に挙行したが、戦争と共に持続してゐる土地は殆んど皆無の有様である。昭和十二年支那事変が勃発した翌年からは華美な余興を中止し、全町民の奉納網曳又は運動競技会を開催して之に替へたが、終戦后再び元のプログラムに従つて^(註)舉行することゝなつた。

(ツ)招魂祭 (五月五日)

兄禎藏は父の死后勘九郎を襲名したが日露の戦役で戦死した。之が当町に於ける戦死者の始めである。戦后四所神社の傍に簡單なる仮殿を設けて毎年舉行せらるゝが、当町では兄一人の為の招魂祭のやうであつて相済まぬやうな心持がした。

大正十年東山公園に雄大な忠魂碑が建てられてから、

軍人会が主催して盛大に行はれるやうになり、殊に三宅中佐が尼港事変で戦死され、福田君が満州事変で戦死されてから祭神の数も増して招魂祭に参列しても気が楽になつた。此忠魂碑は時の軍人会長いせや齋藤惣三郎氏、会員に計つて寄付金を募集し全會員又労力奉仕して建設された。其苦心と努力は容易ならぬものがあつた。忠魂の文字は川村景明大將であり、石材は遠く小豆島より求め、山上までの運搬は全會員之に当り、全會員の真摯な奉仕振りには頭の下るものがあつた。同碑の建設場所の選定に色々意見があつたが、公園の建設に造詣の深かつた明石市の太田技師に選定を依頼した所、薬師堂の付近は広場もあり便利な場所であるが、町に来つた人が忠魂碑があつた山頂にあると一目に見ることに依つて大に意義があると云ふことによつて、此場所が選ばれたのである。

祭典が終つてから軍人会では銃剣術の試合とか、機關銃を一般に観覧試射させたり色々の催しがあつた。

〔原文ツが重複〕

(ツ)端午の節句 (六月六日)

家の内では五月人形を飾り柏餅、茅巻を供へ、屋外には鯉の吹抜や幟をたてること今と同様であり、初節句の家では親類、知己、町内の子供などを招待すること桃の節句と同様である。

此日神社を祀り屋根には菖蒲と蓬を束ねて上げるし、此日は菖蒲湯と言って温泉に沢山菖蒲が浮べてあって、子供達は菖蒲の根の方と根の方を結び合せて鉢巻をして兜の鋏型（鋏）に凝し、女は矢の羽に切つて鬘に挿して頭痛のせない呪と称した。

(ネ)花祭 (五月八日)

仏生会とも灌仏会ともいってお寺では蓮華などの花で小さい建物の屋根をきれいに葺き、参詣人は其家の中に立つてゐらるゝ釋尊の御像に甘茶を注いで礼拝した。今日はお寺で甘茶の接待があるので、子供達は早朝から土瓶などを提げて甘茶を貰いに行った。

出石藩士、土岐久郁氏の和歌にあるやうに

仏さへ浴むてふ日とて遠近の

人もむつれつ 城崎の里

今日一日入湯すれば八十日入湯するに当る効果があるとか、お薬師様に逢った人もあるとか云つて付近の農村から多数の客が殺到したが、汽車がついてからは之等の客も次第に減少してしまつた。

信仰から敬虔な心持ちで入湯する客に対しては、迎へる方も亦神仏や温泉の靈頭を説いて共に感謝の誠を捧げたが、都会の人に靈頭を説いても受容れられず土地の者も次第に同化されて、靈頭とか感謝の念の薄くなったことは共にく遺憾に思ふところである。

今日から八朔までは公然と昼寝が許される習慣であつて奉公人などは此日を待ち兼ねたのである。

(ハ)西谷不動尊 (八月十六、七日)

昭和六年加悦兼藏氏が發起して西谷の住民と協力して建立したものである。加悦氏は三椒村の出身者で

本町に移住してから拙宅の出入となった者である。

大正七年の水災で地中に埋れた不動尊が夢に現れて、我西谷の地中にありと加悦氏に告げたので、恐懼きょうぐ之を発掘して此所に安置したのである。今の堂宇は小林屋の客人の寄進。地幽邃ゆゆうすいにして靈蹟と共に参詣者が多い。因に金毘羅山くまのから此所を通じて行者山、そうして薬師に通ずる道路は元は尺余に足らなんだが、飴新事久保田新一氏の努力により湯島区より補助を得て開發せられたのである。薬師公園の創設に当り献身尽力せられたし、つたや鳥谷浅之助氏と共に感謝賞揚すべき人である。

(ラ)三柱神社 (五月廿七日)

三宝荒神とも云って四所神社が鎮祭せらるゝ、までの大谿村の氏神様であると伝へられてゐる。社前に数百年を経た榎木の大樹が大蛇の如く門を為し蛇蛭と空のび上つてゐたが、震火災の際社殿と共に焼失した。旧来は六月廿七日が祭日であつて城崎の夏祭の魁けであつたが、大正年間一ヶ月早めて祀られる

やうになつた。以前は素人淨瑠璃、福引などの催しがあつて相当賑はつたものである。此祭に掲げらるゝ角の行燈は中路弥蔵氏の創案であつて、同氏が絵画に妙を得てゐて色々の画を行燈にかいて呼物になつたものである。

(ム)秋葉祭 (六月十六、七日)

山頂の本殿まで参詣した年もあつたが、大抵大和屋に出開帳せらるゝを例とした。夜店も沢山出で子供には嬉しいお祭りであつた。後に湯の山公園に仮殿が出来てから、そこで祀られるやうになつた。

(ウ)一の湯神社

元は一の湯の東側に人の気のつかない位の小祠であつたが、明治四十三年一の湯の改築に当り山復やまもとに小祠を作つて遷されたのである。大正の中期頃から盛大に祀られるやうになつたが、神様の盛衰も信者の盛衰に正比例するものである。

(チ)芭蕉堂

板屋三宅まつ刀自の拠金によつて、昭和□年一の湯

の上に庵室が建築されて芭蕉像が安置された。

此像は三宅竹隱先生が今は豊岡市の新田区木内の瑞峰寺にあつたものを貰ひ受け、薬師庵に預けて居られたものである。大正の初年頃安田貞吉氏、西村六左衛門、井上吉右衛門氏等と計つて瀬戸の後藤氏の小島村にあつた小亭を貰ひうけて、東山公園と日和山との中間の地に庵室に改造して建設せられたが倒壊し、更に区の補助を以て東山公園東向の中腹に大正十年頃建設して像を納められたが、震災に倒壊し此地に三度目の芭蕉堂の建設を見た次第である。此地湯の山公園と称し眺望の絶佳なること賞するに余りあり、たゞ登り口の狭隘なること惜むべし。

(イ) 愛宕祭 (七月廿三日)

山頂で祀られた年もあつたが、大抵うお屋旅館(今の松屋と小林屋に当る場所)の上店で祀られた。震災後は山麓う越やの土蔵前に仮殿を設けて、ここに出開帳されるやうになつた。王橋と愛宕橋の間の川上で仕掛火花が掲げられて、夏祭りの呼びもの、一

つであつた。山頂の堂宇は文化十一年八十八ヶ所開設の際、全町の有志寄付金で建設せられたもので工匠は当町藤田定七氏である。

(オ) 四国八十八ヶ所 (毎月廿一日)

初めて山頂に堂宇の建設せられしのは五百数十年前の至徳年間と称せられてゐて、温泉寺の奥の院として千手観音が安置されてゐたのである。其後文化十一年(昭和廿五年今より)観喜院(今の温泉寺)の実音法印と、中性院(寺山にあつた寺)の実雅法印と、極楽寺の仁州和尚の三師が企画し、村民の奉仕の下に今の八十八ヶ所が出来上つたのである。即ち一番は四所明神に初まり金毘羅山より極楽寺、薬師に至り、温泉寺より奥の院、極楽寺茶堂、愛宕社を経て弁天山に至つて八十八ヶ所が終るのである。当時非常なる大事業であつたであらう。近來文化が進むにつれて、文化とは最少の労力を以て最大の効果を挙げる事と考へられて、便利なそうして労力を要せない散策路、参詣見物場所が好まれ

て汽車、ケープル、自動車等の設備のない所は、それが非常な景勝の地であり由緒のある霊場であつても顧みられないやうになつて此廻遊山道も参詣し利用せられやうになつたが、汽車の開通するまでは毎月の廿一日は素より下男下女に至るまで、自分の勤めが終つた夜の十時頃から三々五々此御山を廻ることが流行し、金毘羅様(毘)を迎へて其齋主を勤めてゐられた坂本慧照師が、高野山から消へずの燈明を受けて来られてから、師は如何なる大風雨雪の日と雖も奥の院に登つて、其燈明に油を注いで三年の間其の燈明を消されたことはなかつた。然も日没の頃に當つて折々山中の不思議な所にお燈明が煌々と輝いて、皆は之こそ弘法大師の御靈蹟であると、老も若きも八軒町の道路から此お燈明を仰いで合掌したが、或は坂本氏のトリックであつたであらうが、お大師様に対する信仰は高潮して廻遊参拝の人が多数となつた。毎月廿一日には両寺の檀徒の老人達が茶堂にお籠りせらるゝことは今も持続してゐる。此霊場の開

設に當り温泉寺法印の率先尽力されたのはさることながら、禪宗の極楽寺和尚仁州師が、之事業に協同の努力を払はれたことに大なる尊敬を捧げる次第である。

昭和七、八年の頃から一年一回全区民は四国山道路、寺院公園の修理の為、弁当を携へて一日奉仕すること、している。本町の美化は町民の奉仕精神によりて期せらるゝのである。是非続行を期せたいものである。

(ウ)薬師祭 (七月八日)

此祭を一般に祇園様と呼んでゐるが、祇園さんとは縁故のない筈であるが、何かさう呼ぶ原因があるのではあるまいか。

薬師堂は元鴻湯の上方に円満寺とて温泉寺の下寺の境内にあつたが、寛文十二年今の地に遷されたのであつて、字名に元薬師の名が残つてゐる。今の堂宇は、寛政十二年の建立で工匠は有名なる淡路の住人北条播磨守平(つとむ)の時定である。此建立は非常なる大

工事であつて住職も三世に亘つて之に当り、広く淨財を集め又遠方より泊り掛けで奉仕隊が来つて協力もしてゐる。

家根棟の擬宝珠は遅れて慶応元年大阪の玉造にて鑄造させ船にて瀬戸内海、日本海を廻送して津居山港にて小舟に積み替へ、大谷橋より薬師に曳き上げたのである。此宝珠上げの式には今津、桃島よりさゝる屋台を造つて練り込んで、非常の賑ひであつたと極楽寺の鐘鑄と共に、古老の人から其日の盛況を聞かせられたものである。

祭日には上五町は町内毎に笹をたて幕と提灯を吊り、薬師殿の燈籠には障子に紙も張られて火が点ぜられ、八軒町は毎年作り物をするを例とし、同町には作り物に巧妙な人があつて、金を費さずして趣向の軽妙なるには各人齊しく賞讃の詞を措まなかつた。従来は鳥取県道にて賑はつた八軒町も、汽車が開通してからは旅人の通行も絶無になつて、軒を並べし商店も次第に閉店して衰頹の一徒を辿り、然もお祭りの

沢山ある同町はお祭りに協力する力も衰へて、同町にある神仏のお祭りも昔日の觀なきは又止むを得ざるところである。

(ヤ) 鴻湯神社 (土用の丑の日)

旧来天竺桂(たも)の大樹の根元に山の神様と称する小祠があつた。大正十年の頃であつた。同町の植村久蔵氏の發起で八軒町が一致協力して寄付金をあつめて社殿を建設し、労力奉仕によつて神域を美化し此所に鴻の湯神社を祭祀して鴻湯の守護神とした。震災に鴻の湯は類焼したが此神社だけは不思議と安全なるを得た。

大正七年の大洪水に泉源に故障を生じた鴻湯は其後も免角旧に復し難く、且は地域狭隘にして拡張の余地なく将来の發展拡張を考慮して、湯島区は豊岡町滝田清兵衛氏と地所の交換をして現在の地に移したのである。

(マ) 妙見祭

元本住寺の裏山の中腹にあつたが腐朽して本堂に長

らく祀られてあつたが、大正十二年の頃は、旧来の位置に再建されて、そこに遷されたが、震災の際倒壊して再び本堂に仮住居をしてゐる。此祭りも売店などが沢山ならんで相当の賑はいを呈した。

(ケ)川下祭 (七月卅一日)

弁天山の山頂の弁賊天を祭る湯島の下流にある神社であるので之を川下さんとして祭るのである。他の川下祭は卅日であるのに当町は卅一日に祭りを挙行するのは如何なる故であらうか。豊岡の川下祭を濟ませた軽業、手品、のぞき、葉売り、易者、五目ならべ等々の俗に野師^(音)仲間の連中も、当町の売店と共に店を張つて非常の賑はいを呈するお祭である。大正の末に福引素人角力の催しもあつた。

此山は古く兎島と呼び、中途神楽岡とも云はれて神功皇宮^(音)の三韓征伐の際、此丘にて神楽を奏せられたとも伝へられてゐる。元海上の一孤島であつたが海水が減退して陸上の一小丘となつたのである。

西北の山麓にある井戸水は鹹味を帯び、周囲の岩に

貝殻が付着してゐることを見ても、孤島であつたことが肯ける。此山に弁財天の祀られたのは随分古いことであらう。温泉寺の本尊が道智上人に依つて仮安置されたのも此山である。椎、松、たも、などの老樹が鬱蒼として枝を交差し、千年の昔を物語つて居つたが、震災の際類焼して一木も止めないやうになつたことは惜まれてならない。

尚此山は山裾と共に可なりの地域があつて、古く極楽寺も西南隅に建てられて居つたそうだが、周囲に人家が建てられて山麓は次第に削り取られ、殊に山西広場に小学校が建てられた時に切り取つて、学校用地と道路が設置されて自分達が覚えてからでも今は半分に縮少^(マ)されてゐる。

(フ)美保の関神社

明治廿年を過ぐる数年の頃であつたであらうか、竹野村大谷久四郎氏、塩屋谷垣^(音)氏の婿養子として入嫁されてから、自分の里が船持であつて美保神社を崇敬されてゐた関係から、南仲^(音)の町と計つて此所に勧

請されたのである。祭時には福棒が撒かれ餅まきもあつて、久四郎氏在世中は可なり盛大に祭典が行はれたが、死去後は此祭りも次第に寂れ震災後は谷垣氏に引取つて貰つたそうだ。(中略)

(二)土用の丑湯

土用の丑の日を牛湯といつて花湯と共に付近の農家の人など多数来浴して大に賑はつた。此日土用の腸餅へんぱうと云つて餡をまぶした餅を食し、又土用鰻と云ふて鰻をも食する日であり、客人にも供するを例とした。近來当日は海水浴場も共に賑ふのである。

(三)鬼子母神 (土用丑の日)

昭和五年頃北上、北中両町には神仏の祭るべきものがないとして、月本虎一、門脇広吉両氏町内と計つて、千葉県中山町の本山より御分霊を受けて来て柳湯の傍に勧請されたものである。

本住寺にも従前から鬼子母神が祀られてあつたが大して賑はしくも祭られなかつた。

(四)夏祭の歓喜

以上記した通り七月を中心として各所にお祭りが舉行せらるゝが、子供達はお祭毎にお賽銭を一、二厘と、お小使として一銭か二銭を貰つて参詣することが非常の喜びであつて、ノゾキが一銭、軽業が一銭、餅や饅頭が二厘、五ツ串に刺した串団子が五厘や三厘であつて葛饅頭が三厘になつた。焼印の押した判餅が三厘になつた。おいしいことはおいしいが高いなあと目を見張つたものであつた。鉛の色々の人形や玩具がせんべいに包んであつて之を包煎餅と称し、子供達の間で人気があつて之が三厘や五厘であつて、当時は子供のおやつは薩摩芋、蓬餅の塩味、炒豆位であつて、お使に行くに御駄賃として先方から手の平に黒砂糖を少し乗せて貰つて、之を舌でなめて鳥の糞と言つて大変喜んだ位であつて、山苺や桑苺(ヒナビと称した)梨、栗、柿、ダンジ、アク花、シ草、茅の芽様のツバナと称するもの、小梅、梅、桜の花の塩漬、椎の実、桃、岩梨、ケビの実、アケビ等、野生の物を山野にあさり、又川魚、蜆、蛤などを獲

って之を食し、菓子などは極稀に戴けるものとして少しの不平を感じなかつた時代であつたから、お祭などは非常の喜びの日でもあつた。昭和三十年から三十五年位の頃のことである。

日露戦争から生活も可なり向上し、大正昭和と高潮に達したが大東亜戦争になつてから、極度の食糧不足から子供達が、五十年の昔に返つて自分達が子供の時におやつを山野に漁つたと同じ現象を呈するのを見、いじらしい笑ひを催した次第である。

(ア)七夕祭 (八月七日)

笹に式紙(マ)の丹冊(マ)をつけ提灯を吊り果物、農作物などを供へて御祭りした。当日は下男に新しい禪を与へて山麓の鍔錫泉の井戸替をするのを例とし、西谷及極楽寺の共同井戸の水替清掃を、使用する人達が出でて勤め、墓掃除も大抵今日行ふのを例とした。

(イ)盂蘭盆会

盆ともならば十三日の夕は一家揃つてお墓に参り帰つて仏壇を礼拝すること、十四日の朝夕、十五日の

朝も同様である。十四日は特に親戚知己のお墓にも詣で、夜は町内親戚知己恩人の家の仏壇にも詣り焼香して、お互に中元の挨拶をとりかはすのである。各宗寺院も棚経と称して各戸の仏壇に参詣に來られたが、繁を避ける為め大正の生活改善の頃より、自分の壇下(マ)の仏壇丈けに廻られることに改められた。

尚中元の贈答品も極度に禁ずることを原則に改められた。

十五日の夜は仏様送りと云つて麻幹(マ)で作つた船に燭(マ)をともし線香、団子、瓜、茄子などを供へて、地藏湯の下方から流されたが其燈火が水に映じて美観を呈した。

十六日は亡靈が出るから川遊びを止められたが、子供達は船に乗つて蛤取りに出る途中、昨夜流された仏船の中で梨瓜、まくわ瓜、梨などがあると拾つて食し、仏様(マ)は亡靈などは恐ろしくとも考へなかつた。

私の家は真宗であるので他家のやうに別室で仏様を祀るでもなく、色々の物をお供へするでもなく、団

子と他家から御供を頂いた物をお供へする位であり、十五日の仏様送りなども勿論しなかつた。

十三、十四、十五、十六日の夜は旧来からある「ヤーアトセー〜」^キ「チョトサ、コラサ」と云ふ合の拍子をとる盆踊が夜明けまで踊られる。踊の場所は四所神社の境内（震災前まで）一の湯前、御所湯前、まんだら湯前、地藏湯橋南、西彦旅館前（震災后より）等であつた。

此踊の外、芸踊といふ当村独得の踊があつて、音頭に合せる一定の踊型や拍子はあるが踊子の扮装は各自自由であつて、「定九郎と与市兵衛」の組もあれば「勝五郎と初花」^キ「初菊と十次郎」^キ「関取と火消の喧嘩」^キ「弁慶と牛若丸」^キ「辻切と取手が二人」と云ふ風に、各々秘密裡に趣向を考案し、衣裳さへ新調して人々をアツと言はせるのである。中には役者を招聘して稽古の手をつける凝つた組もあつて、奇想天外の数十組が囃子櫓を真中にして絢爛たる扮装の踊子がぐるぐると踊り狂ふのであるから、実に美しく

見あきがせない。

明治廿八年と覚えてゐるが拙宅の前に櫓が立てられて、播州座の玉三一一座の小玉と云ふ歌舞伎役者が櫓の上で指図してゐたのを僅に記憶してゐたが、此年拙宅の姉しげが三浦之助になり、中田屋のお花さんが時姫になつて踊つたと見へて、緋織の鎧を着た姉と振袖の花ちゃんの絵姿とした額が、薬師堂に奉獻されて長く掲げられてあつた。此芸踊は其年ぎり中止されたと見へて其後は見かけなかつた。大正の中期に安田貞吉氏が主唱されて、蓮成寺の東側の広場で復活されたが踊子の衣裳に可なりの費用が掛るのと、前方に稽古を要するので二年位で又中絶した。

(キ) 雨乞

土用前后に長らく雨が降らず田畑に亀裂が生じ土煙がたつ様になつた年には、農業に従事する者達が温泉寺茶堂に籠り、夜大きな篝火を焚いて雨乞をした。今津村などは愈々困りきると、来日ヶ嶽の頂上に登つて篝火を焚いて雨乞を催すのであるが、不思議に

三日間の内には降雨を見るを常とした。昭和十四年は未曾有の大旱魃であつて、四月廿三日に大雨があつて温泉祭も開山忌も六湯の祈禱もすることが出来ず、僅に神官と助役と共に自動車に乗つてやつと六湯を廻つた丈で、お祭もめちやくであつたが以來、来る日も来る日も晴天のみ打ち続いて、今津村は全般に亘つて植付が出来ず、僅に土瓶植と称して土瓶で水を注いでは苗を植ゑたが、田圃には土烟（煙）がたつて畑と異らず、僅に水があつて植付をした田圃も深い亀裂を生じて稲は次第に赤くなり、大河の水は次第に鹹味を増して手の施しやうもなくなつてしまつた。然し小作人は免も角も、自作の農家は他に賃金を得る道があるのに、助りそうもない稲、育ちそうもない稲に毎日／＼朝から晩まで遠方から水を運んで根元につけ、草を刈つて根本に置いて太陽の直射を避けるなど、恰も病人を看病するが如くに悪戦苦闘する様、実に其の労苦は絶大であつて涙ぐましい程であつた。之を農魂とも称すべきであらうか。

当町に於ても上水道の水源は日に細り、夜間は断水して昼間送水して百方手を尽す一方、トンネルの水の竹野谷に落ちる部分を逆に城崎に送る方法、又は今津観音浦の水を中途の山頂に引きて濾化（濾）して、城崎に送水する方法等の計画を樹て、県に依頼して技師を招聘して設計させて見たが、電力は制限中であつて工事に応ぜず、水管セメント等も極度に制限があり、然も非常の巨額を要するので、咄嗟の間に合はず夜も落付いて寝られぬ焦燥憂慮を感じた。

茲に於て長らく中絶して居つた雨乞の議が起り、農業者の請を容れて温泉寺茶堂に大篝火を焚き、温泉寺法印親しく臨んで密教の秘法を修行せられ、今津部落も嶽に登つて祈願したが其蹟も見へなかつた。但し但馬でも困つた所は城崎今津桃島位であつて、他の町村は非常なる豊作であつた。播州、備前を中心とする中国でも水喧嘩が各所に起つて、此旱害は相当広版（版）に亘つたが、旱魃に飢饉なしの諺の如く全国的に見て此年は非常の豊作であつた。

此旱天は四月廿四より九月二十日までの間、二、三回の小雨を見た丈けで、有史以来の大旱魃と称して誤りではないであらうと思ふ。茲に注意しておきたいのは郡農会の技師が土瓶植を奨励したが、百性達は之を冷笑して応じようともせなかつたが、度々の推奨に之を行つたが、可なりの収穫を得たことである。城崎上水道の水源につきては公人の巻で述べたいと思う。

(二) 日和待

雨乞とは反対に雨のみ降り続いて困る年があると日和待と称して、上部と下部は各々孟宗竹で屋台を造り之に提灯を吊つて昇ぎ廻つて、日和の来らんことを祈つた明治卅年頃のことである。此年以後覚へないからこれが終りであつたであらう。上部と下部の日和待ちの竹輿が接触すると壇尻意識があつて、忽ち喧嘩競合ひが始まるが昇ぎに慣れた上部は、日和待では何時も強いと噂し合つてゐられたから以前は度々出されたかも知れん。

(×) 行者祭

毎年山頂の社で祭典が挙行され同社には祭祀田があつたから、其年貢で当日の力士の握飯や其他の費用を賄つたものだと、川村惣太郎と云ふ八軒町の老人から聞かされたことがある。私の五、六歳頃であつたから明治廿八、九年の頃であつたであらう。拙宅の下男の角力の強い男に連れられて、力士席で見物して握飯、多分小豆飯と覚へてゐるが、それを貰つて食したこと丈け覚えてゐる。余興の素人相撲も卅年頃から中絶したのではあるまいか、中腹の広場が其相撲場であつた。

此祭りは山頂で行はれたから相撲がなくなつてからは賑やかなお祭りではなかつた。自分達の子供の時代中部や下部に対抗して戦争をした上部の本城として、此山は親し味を感じる次第である。本尊は今温泉寺に保存されてある。

(三) 観音祭 (八月十七日)

温泉寺で執行され一度参詣したことを覚へてゐるが、

盆后と共に特殊の人の外は参詣する人はないであらう。

(シ)地蔵盆

各町内毎にある地蔵尊を詣ること今と変りはない。

此の日も団子を作ってお供へすること盆と変りはない。此夜も終夜踊り廻る。

(エ)八朔 (九月一日)

当日は朝早くから藁を集め上部は薬師境内で、下部は弁天山の山麓で各々一抱へもある大綱を作り、所々に短かい引繩を取つけて、子供も大人も八巻(ハ)をし軽装して、「打ツテクレ〜」と大聲に叫びつ、町中を引き廻つた。大蛇になぞらゑて山野を荒し人を喰ふ大蛇を獲ゑて大地に叩きつけるといふ表現か、「打ツテクレ」と聲をたてると共に上下に繩の大綱を大地に叩きつけるのである。やはり上部と下部が接触すると風雲を捲き起したらしいが、此日は大した喧嘩を起さず互に威勢を示したに止まったそうだが、此催しも卅年まで位にて中絶したのではあるまいか、

詳細に聞かせてくれた人もなかった。

卯月八日に始まった奉公人の昼寝が今日から中止されるので、此日は奉公人が大面(オ)をすると笑はれた。

(ヒ)八幡祭 (九月十五日)

四所神社境内の八幡様を詣り下部の祭太鼓(カ)が鳴(ル)城崎の無格社のお祭でも仏様でない(キ)と認められる神様のお祭りには、上と下とを論ぜず壇尻太鼓が鳴らされたのである。当日は桃島のお祭りであつて時たま桃島の御輿台が坂を越して城崎に来たこともあつた。近年に至つて桃島も城崎と同様、十月十五日祭りに改めた。同社殿は震災前までは可なり立派な小社であつた。災后久保田順三氏、輪笠与八郎氏と私と三人で寄進し、別に維持料として公債金弍百円を添へたが貨幣価値が下がつて何の役にもた、なくなつた。当時惣工(ク)費金參百円を要した。

(モ)氏神祭礼 (十月十五日)

四所神社は和銅元年鎮祭せられたが、当時から既に盛大に祭典が執行せられたやう曼陀羅記に記してあ

る。当日は温泉寺別当は神輿に供奉して先づ曼陀羅湯に至り、出湯の弥栄を祈念し終つて後門より曼陀羅屋に入り、主人と親しく猷酬の礼を行つてから神輿は街を練り廻つたとある。

徳川末期の頃までは現在の門と温泉浴場の中間に西に向つて勅使門と称する古い大きな門があつたが、夫が腐朽して保存に困つたから取毀したと父が申してゐた。其後も明治三十二年頃昔の門になぞらゑて新に門が新設されたが、明治四十四年まんだら湯の改築に当り、拡張して浴場が表に出たから支障を生じて其門も取除けたのである。まんだら記の後門とは此所の門を指して云つたのであらう。

温泉寺の文献にも神輿を温泉寺から下し、住職は駕（註説）に乗つて宮に至り、宮遷の式を終つて行列も美々しく先づ曼陀羅湯に至つて、祈禱を了へてから市内を練り廻つたとある。祭礼は旧九月九日であつて宝暦の頃の行列と役割が左のやうに記してある。

夕祭の役割

一、露払	一人	一、榊	一人
一、鉦	二人 <small>手がはりあり</small>	一、若宮鉦	一人
一、歩士	二人	一、膳	二人
一、御神酒	一人 <small>手がはりあり</small>	一、御太刀	二人
一、御幣	一人	一、御弓	
一、御鉄砲	一人	一、御輿台	一人
一、志やんぎり	子供仲間		

以上

本祭の役割

一、露払	一人	一、榊持	一人
一、鉦	六人 <small>手がはりあり</small>	一、若宮鉦	一人
一、歩士	六人	一、御膳	六人
一、御神酒	一人	一、御幣	三人
一、若宮御幣	一人	一、弁財天御幣	一人
一、御太刀	一人	一、御神輿	十二人
一、御道具	一人	一、はぐま	一人
一、御鉄砲	一人	一、太鼓	三人
一、長柄	一人	一、御弓	

一、御膳台持 一人 一、神輿台 一人
 一、太かぐら持 六、七人 一、くらかけ持 一人

以上

上部の太鼓台は祭具として前からあつたらしいが、上部の若い衆が之を昇いで暴れ廻り、其ま、捨て、後片付をせなかつたので温泉寺から叱られて、詫び状を係りの者が差入たことが文献に載つてゐる。下部の檀尻は明和二年に出来て、此年から弁天さんに御旅所が制定されてゐる。太鼓台や檀尻は他の地方にも沢山類例の物があるが、祭太鼓は他の地方にも似寄りの囃子がない。京都の鳴物を取入れて城崎独得のものに工夫したとも伝へられてゐるが其起原は伝へられてゐない。

祭礼の期日が十五日に改められたのは明治になつてから、官庁に或る指導者があつて、お互に祭り参りの繁を避け冗費を節約する為、但馬の祭日の中庸を取つて十五日に改めるやう奨励勸奨したものと見えて十五日祭りの町村が多数にある。

三日祭は檀尻が出来て弁天山に御旅所が制定せられてから以來続いてゐたであらうが、明治の末年の生活改善から十四日を宵宮として十五日を本祭りとして日に短縮されて、檀尻連中から可なりな反対の意見も出たが上層階級に押へられてしまつた。以前は十四日を宵宮といつて宮本町の飾付を担当し、各戸は国旗、高張を掲げ幕を張り、道路に面した下座敷は表格子を取はずして、段通を敷き屏風をたて床飾調度品を自慢顔に飾り、辻々には明日の渡御の爲にと盛砂を用意し、子供達は朝から小檀尻を曳いて遊ぶ。午后になると下部の大檀尻が威勢よく薬師暎の中途まで敬意を表しにくる。此時上、中、下の若い衆は結構なお祭を迎へし挨拶を交し、本年の祭典はお互に楽しく賑はしく挙行しようと手を握り合つて喜色の裡に分れ、下部の檀尻が帰ると太鼓台は、やをら手配りをし小檀尻を従へて神社に参拝して中の町坂本屋前で引返す年もあり、王橋まで下つて下部に威勢を示して帰るを例としたが、二日祭りにな

つてからは九日屋の前（田中医院の上小林別荘前）
 まで、駅前之家が建並んでからは駅前まで出てるや
 うになった。其夜は太鼓台は極楽寺の山門に、小檀
 尻は曼陀羅町に泊り曼陀羅橋の上で太鼓が打ち鳴ら
 される。

小檀尻に泊った子供達は未明に起きて「トトモ、カ
 カモ起キシヤンセ、起キテオコワヲ蒸シヤンセ、東
 ガシランダ、夜バイドハ、イナシヤンセ」と半鐘や
 太鼓に合せて高らかに部内を唄いまはる。其頃にな
 ると家々からは家内中打揃つて礼服に身を正し、赤
 飯や甘酒を携へて神社に参詣するのであるが、神社
 では早くも下部の祭太鼓が打鳴らされて居り、参道
 の両側には大幟が朝風にはためき、高張がともされ
 大篝火が赤々と燃えさかつてゐる。社殿には長提（釘提）
 が吊られ大鉦、旗、熊毛等の祭具がたてられ、紫縮
 緬の奥深く末だ明け切らぬ小暗き中に、お燈明が淡
 く照してゐる社殿に頼いた時は、ひし〜と御神靈
 の身に迫る難有（マ）さを感じて、涙のこぼれるやうな感

激に頭の上らない思持（マ）がする。帰つて拙宅の神様に
 お詣りをし赤飯の朝飯を食べるが、落々家に居る心
 持になれない。子供達連中と共に小檀尻を引つ張り
 出して宮様の方に行くと、下部の小檀尻も来て居つ
 て接触して小競合ひを演ずることもある。

午前九時すぎには一番太鼓次に二番太鼓が廻る頃
 になると、各役割の人稚児番に當つてゐる家では用意
 を整へ、正午の頃の三番太鼓が廻つて来ると夫々境
 内に勢揃へをして宮移しを待つ。すると上部の太鼓
 台が威勢よく境内に這入つて来て、参道の西側に小
 檀尻は塀外に据へて太鼓を鳴らしてゐる。昨夜中部
 に泊つて居つた大檀尻は中部の若い衆によつて一た
 ん下部に下げられ、勢揃へして上部の太鼓台が宮様
 におさまつて時期のよい頃を見計らつて、威勢よく
 神社の前に来て度度県道を上下し、境内には入る
 と「トツテン、トンチキ」の太鼓の音に合せて参道
 の東側にて、だんじりを廻し其余勢をかつて参道を
 乗り越へて上部の太鼓台に喧嘩を挑むが、青竹を持

った警護は之を制止して参道の中央を越させないやうに努めるが、其制止も肯かずに参道の中央を乗り越さんか、祭礼の規定を犯す不法行為であると太鼓台は猛然たつて大だんじりに突進して之を撃退する。双方の警護は其間にあつて双方の檀尻を制止して事のなからんと努めるのであるが、此所が喧嘩の第一関門であつて、此所の治まりの如何が其年の喧嘩の大小を率するバロメーターである。

自分の青年の時代に数を頼んで大檀尻が屢々越境せんとする行動があまりにも潜上ひそであつたので、太鼓台を突込んだ所、遂に大檀尻の格子及び欄干を破壊したので、其年の祭礼は目茶／＼になつて正規の渡御は行はれないで終つたことがあつた。斯様な恥辱は祭りの始まつてからない事であると、下部の老人は涙をこぼして残念がった者さへあつたそうだ。此場所の競り合ひは大低無事に治まるを常とし、それが納まると同時に奏樂につれて宮遷しの式が行はれ、其間は太鼓、半鐘は一切止められ、参詣者一同

恭しく頭を垂れてゐる。其間神官は御神体を神輿に遷され、終ると一同拍手を打つて礼拝する。実に厳肅な一時である。斯くて大檀尻は下部に下る。神社では露払いを先登に古代行列、稚児、神官、町長、氏子惣代、町区名誉職員之を供奉、盛砂の敷かれた道路を肅々と曼陀羅湯に至り、神官は祝辞を奏上し終ると神官も稚児も拙宅に休憩して、上、下の檀尻の来るのを待たれる。宮に残つた太鼓台は七ツ段を登つて社前で芸の限りを尽して神慮を慰め、曼陀羅湯に休憩の神輿のあとを追つて拙宅の前に位置して休憩する。

昔は神輿、太鼓台、大檀尻、小檀尻が全部揃つてから曼陀羅湯に祝辞が奏上せられたものであるが、何時も大檀尻の来ようが遅れるので、待ち兼ねて祝辞を先に奏上されて待つようになったのである。さて遅れて曼陀羅湯に到着した大檀尻は、此所でも橋詰まで来ては引返し、又橋詰まで来ては県道のあたりまで引返し、其余勢を藉りて橋上の中央を越すと、

太鼓台は不所存者を撃退せんとして突進して、昔此所で屋根瓦が降ると云ふ大喧嘩が出来て、流血の慘事を惹起したことがあつたと語り伝えられてゐる。此所がお祭りに起る喧嘩の第二関門である。此争が静まると神輿行列のあとに太鼓台は扈從こしよして、行々家々の申込みに応じて祝辞を奏上しつゝ、寺町、八軒町、六軒町、両御所、中の町の順序で王橋を渡つて南側を弁天山に至つて、其夜は泊らるゝのである。太鼓台は大抵王橋乃至旧九日屋前から引返して、今日は上部のお祭りであるから上部で面白く賑やかに遊んで其日は終るのである。大檀尻や下部の小檀尻は王橋までは神輿に太鼓台と共に扈從するが、輿神輿太鼓台が王橋を南に渡ると北側を下に下つて遊ぶのである。

十五日は午前到大檀尻が八軒町まで上つて引返すと、太鼓台及上部の小檀尻は手配りをして、弁天さんに泊られた神輿に従つて、地蔵湯橋より北側に渡り、今日も申込みをうけた家々に祝辞を奏上せらるゝ、お

供をしつゝ、御宮様に帰るのであるが、下部の大檀尻は一の湯前にて神輿、太鼓台の帰りを阻止して帰さず、毎年此所に於て大喧嘩が初まるのである。明治三十四年自分が十一歳の年に此所で喧嘩が初まつて、下、中の連中は木屋町橋付近の川中より小石を拾つて上部の檀尻目がけて石の雨を降らせたので、双方に負傷者が出来、警察の制止其効なく、最後まで小檀尻を押し居残つてゐた少数の我々は、大人から先に帰るやうにと言はれて、葬れん町から山裾を逃げて上部に帰つたが、後に残つた地車だんじりや若い衆の安否が氣使運はれて安き心もなく、子供達相寄つて心配してゐると、夜に入つてから提灯に囲まれながら帰つてくる勇ましい姿が、坂本屋の前に見へた時は涙がこぼれてものが言へなかつた。今も其當時を追憶すると童心に返つて、其光景が眸に浮んで来る。然し其年を境として以来石の降るやうな騒ぎは起らぬやうになつた。

以前は人と人との撲り合い位は普通であつて、石や

屋根瓦の降る喧嘩も珍らしくなく、或る年の如きは日中の喧嘩の紛争が解けないで、夜に入ってから上部は蓮成（蓮成）に、下部は宮の境内に対峙して大篝火を焚き、額に濡紙をあてて其上に鉢巻を為し、手にく得物を持ち四斗樽の鏡を抜いて氣勢をあげる。上部の娘、宿屋の女中は招集されて炊出し用意をする。之を鎮めんとして調停に当る上、中、下の上層部の老人有力者達も、心配して鎮庄に努めるもの、お互いに心の中ではひけを取らせたくないと言ふ風であるから、毎年闘争が繰り返さる、次第であるし、昔は上と下部の勢力伯仲して居ったからでもある。十五日祭礼が終わってから、下部は伊勢音頭で宮様に幣納めをするが、上部はそれを行はないのである。大正の中期であつたと思う、三日祭りは多額の費用を要するからと二日に短縮せられたのである。十六日は後宴と称し宮様では神輿祭具の後片付を、上部も下部も地車のあと片付をし、入費を計算して若衆宿にて慰勞の宴を催した。

右に述べたやうに昔から祭日には上、下の闘争意識が熾烈であつたから、祭礼の日は下部に嫁に行つてゐる者は上部に里帰りを為し、上部に嫁に行つてゐる者は下部に帰つて里方の方に聲援する者もあり、召使に至るまでお互に上、下の意識が画然として口争いをするし、遠方に移住してゐる者も当日はわざ／＼帰つて夫々の檀尻に加勢するなど、太鼓や半鐘の音を聞けば血や肉の躍るのを覚えるが、それは当町に生れた者だけが知る興奮であり感激である。此の祭礼こそは老幼男女等しく指折り数へて待つ一年中で最も嬉しい最も楽しい行事であると、書き残しても今の若い者、後代の者には理解出来ないであらう。上部は太鼓台も小檀尻も全部の付属品も震災に難を免れたが、神輿、祭具及下部の檀尻は悉く皆焼失してしまつた。如何に檀尻が復興したくつても、震災復興に力以上の負債を背負つてゐる現状では地車（ぢり）どころではないであらうと思ふ。昭和八年に下部は寄付金を募集して立派な地車を新調したのには上

部の者は実に驚いたのである。然し下部にも檀尻が出来たことは上部にも嬉しいことである。早速上、下打合せてお互に檀尻を出して震災后、初めての賑はしきお祭を挙行した。

然しながら祭具に過ぎない檀尻のみ出来ても、肝心の神輿が出来なくては神慮の程も如何と痛心する者もあるが、痛心する計りで震災の創痕の癒えない現情にあつては到底復興する余力が氏子にはない、こ

う云ふ情態の折柄西村佐兵衛氏を介して、一人で神輿を寄進するから御請け願へるであらうかと云ふ申出があつた。神社側に於ては当方から御願いしたい位の折であるので、有難く受納することに一決して、早速石川県輪島町の川端与三左衛門氏に製作一切を注文した。川端氏は先代以来城崎を得意先とせらるゝ漆器店である。其縁故から犠牲的に立派な神輿を謹製して納入せられたのが今の神輿であつて、大きさは兎も角質に於て之を凌駕するものは三丹に於てはないであらう。この寄進者は料亭みどり事森本

とく氏であることが出来上つてから発表せられたが、氏子一同は此美挙を挙つて賞揚した程、当時の個人財政は窮境を脱してゐなかつたのである。

之に感激して氏子でも祭具及供奉の古代行列の祭具、装束を京都に注文し、上部も太鼓台、小檀尻に大修理を施し幕を新調した。祭礼には古くから三木屋、西村屋と拙宅では鉾持を受持たされるので役割の籤は引かないことになつてゐる。

(七)天神祭

末社の天神様を祀る昔から此祭は大して賑はしくなかつた。震災前には今の八幡様の所にあつた。今の天神社は細口仙蔵氏の一建立である。

(八)旧天長節

今は明治祭と改められたが、此日は大抵小学校で生徒の秋期運動競技会が開催された。

(九)年籠

十二月寅の日から辰の日までの二夜三日に社務所でお籠りする行事がある。申込んだ者は此三日間は我

家に帰ることは出来ないで、弁当を家から運んで貰って、身心を清浄にして神に祈願を捧げる所謂精神の清浄、神社崇敬の練成修養が本旨であるが、お籠りする大部分の人は囲碁将棋、浄瑠璃、賭博等一芸に秀でた人ばかりで大に賑はったものであったが、世の中が忙がしくなつてからは三日間もお籠りするのと云ふ人もなくなつてしまつた。

(A)年越

変る世を 昔のまゝに 除夜の鐘
 今日是一年働いてくれた家族召使の慰勞の小宴を催し、主人は末座に坐して一同を歓待するのである。

(B)其他

其他出石の初午祭、尾崎の琴平祭、竹野浜の川下祭、氣比の絹巻祭、奥佐津の三川祭、久美浜の如意寺の観音、河梨の不動尊等のお祭りには、三里六里十二里の山坂を日歸りで参拝する者も沢山あつた。それは慰安の少なかつたことにも依るのであつたであらう。又近村に芝居などの催しがあると若い衆に招待

状が来て観劇に行くことがあつたが、これは田植休み即ち早苗植終をサノボリ(土)と称す者で農村でよく行はれた。

二、第八卷 地震の巻

(一) 城崎節

西村町長就任の翌年福知山運輸事務所の粹所長の勸説で、其推挙に依る大阪の長唄の家元杵屋勘左衛門氏に城崎節を作曲させることになつた。当時宣伝の爲に俚謡を新作することは尖端的の企画であり、其作曲者が長唄の家元であるといふことに迷惑を感じて、素晴らしい唄が出来るであらうと大なる期待を以て待ちうけた。さあ師匠の唄が出来上つたと其弟子の一行が来著(著)したので、委員に任命された谷垣義三君と自分は議員、宿屋や料理屋の役員及び向陽楼、みどりの女将、老妓等を、西村屋の西別荘に招集して其披露会を催したが、節廻しがむづかしい上に新し味がないのに悲觀した。然らばどう云ふ風に改良

して貰ふと指摘も困難であり、他の土地の民謡の改作も望ましくないし、兎に角大衆に歓迎される覚えよい新清味のある節に作り直して貰ふやう希望したが、改めて出来上った節も一部玄人筋には賞讃されたが、一般には歓迎されそうもないので少なからず幻滅を感じた。

要は古風な家元に依^委嘱したことが失敗であつて此上改良を試みても到底多くを期待出来ないのと、且は費用の点も考慮して採用したのが今の城崎節である。

此時分から名士による作詞、洋楽家による作曲が流行し出して、僅二年後に野口雨情、中山晋平氏によりて新作された三朝節は同氏の早期の作品であり、秀逸でもあつた為忽ち全国に喧伝され、以来統々各地の温泉名勝遊覧地に俚謡が作られて、折角他に魁けて作つた城崎節も革新期の一歩以前であつた為、次代の流行を察知出来なかつたといふ不運のため、宣伝効果を發揮出来なかつたことは遺憾とするとこゝろであつた。中山晋平、野口雨情氏其他名士による

俚謡も一時は天下を風靡したが、あまりの汎濫と乱作に遂に世間に飽られて、城崎小唄を押し売された昭和十年頃は既に顧みる人もないやうになつて居つた。因に城崎さわぎは向陽楼の女将などが作つたものであり、城崎音頭は町役場の主催の下にみどりの女将、唄の師匠等が主となつて、ゆとうやの若主人(寿二)西村佐兵衛、坂本誠一諸氏や自分達も加はつて、昭和八年頃新作し其歌詞は一般から募集したものである。

ここは山陰城崎駅よ…………… 西六

おほろ月夜の柳の並木…………… 石田

帰らしやんすか袖引止めて…………… みどり女将

出湯城崎涼しいとこよ…………… 塚本梅吉

逢ふた一夜は二人の世界…………… 西村勘三

泣いて別れた水明楼の…………… 公募中より
不詳

雪の城崎スキーの名所…………… 塚本

(2) 地震勃発

大正十四年五月廿二日名古屋の列車団を送り出

した城崎は、同日西村町長其他有志によつて結成された山陰道町長会の其第一回の發会式が城崎で開催されて、其夜は豪華な城崎倶楽部の楼上で大宴会が催され、宴酣なる頃最近出来上つた城崎節と其踊を上演して大に喝采を博した。

尚同夜県主催の神戸絹業博覧会の余興に特に知事の招聘による、素人芸妓を交へた三十余名の城崎盆踊の一行が、坂本誠一団長の引率の下に夜行で出發した。それ程当時の城崎は日本に於ける新興の温泉地であり、収容力は別府に次ぎ関西に於ける龍児でもあつたのである。

翌廿四日は町長会の一行をモーターボートに乗せ、我々議員は半数は玄武洞に、半数は同乗して日和山の案内接待役に当り、日和山では渺々たる日本海の眺めに鮮魚美酒をすゝめ、午前十時頃から昼餐の会場玄武洞に向ふべく、芸妓仲居も町長も分乗してモーターボートで津居山を發し城崎中の島の沖合にさしかかると、異様な音響と共に船が大きくシヨッ

クをうけて上下に動揺し、川の中の鯉や鱒が一斉に高く跳ね上つた。不吉な事が起る時は俗に虫が知らせるといふことがあるが、昨夜来聊かの前兆もなく予感もなく、今日も船中で城崎節を唄いながら愉快に朗らかにたゞ機械の故障位に考へてゐたが、左岸を見れば楽々浦口に建築工事中の内川の小学校が目茶苦茶に倒壊してゐる。右岸はと見れば中の島を隔ててホテルは見へるが駅の建物はどうしたことか目につかない、其奥は黄色の土煙が立籠めて何も見へない。暫くすると一たん上昇した土煙は次第に下つて層をなし風につれて新田屋の方に流れて行く。

駅前には石油の貯蔵庫より外に爆発するやうな物が置いてある筈がない、地震だとすれば来日山が噴火したのではないかと見上げると、泰然自若として少しの異状も認めない。兎に角大変な事が出来たであらうと、急ぎ船を駅裏に着けさせる頃になると今津村の川沿いの倒壊家屋から助け出した負傷者である、背に負ふて城崎に向つて駆けつける人もある。

船中で羽織袴を脱ぎ捨て、身軽になり駅の線路を踏み越へると、ホテルは建っているが駅の建物は無惨につぶれてゐるし、駅前松ヶ崎は倒れている家もあるが大方は傾いたまゝ、建つてゐる。学校も講堂本館は割合に完全であるが東側の新校舎はよく倒れないと思う程西側に傾斜してゐるが、それでも危うく倒壊を免れてゐる。校舎及其南の空地には人が右往左往し、生徒は先生を取巻いて蜘蛛の子を散したような騒ぎである。

校舎が倒れてゐないから孝雄も此中にゐるであらうが見当るところの騒ぎではない。西村町長は我家に帰るところではない、校庭さして行かれたが責任者は気の毒だと思ひながら、こじまやの裏道まで行くと美濃部富次郎、石田与太郎等の西谷の連中に出逢ふ。何所に行くのだと尋ねると学校に子供達を迎へに行きます、お宅は大丈夫ですが通れない位家が倒れて居つて大変なことですと言ふ。やれ／＼家は無事であるらしい道が通れないと言ふから、山伝ひに

帰らうと愛宕山に登り其中腹を横切ると、目の前のゆとうやの邸内は倒れたり傾いたりして、玩具箱を引繰り返したやうな有様であり、みなとやの方面に當つて早くも煙りが上つて居るし、中央の家は倒壊してゐるのか秋葉山麓の四階建の志なのやの新別荘がそのまゝ、三四階が見へる。清水の上に来ると西村屋の新座敷が今燃えつゝ、あるのか煙に捲かれてゐる。稲荷様の上から漸やく下つて主家に駆け込んで金庫の前に行くと、金庫は扉を下に俯伏せに倒れてゐる。

皆避難したのか人影一つ見へない。家を出て丹波屋敷を見てもあたりに人も居らず、たゞ京都の今西様が預けた金入に大切な書類があるから何んとかそれを出してくれないかとせがまるゝまゝ、四寸角の柱を持って這入つて枕をして跳ね上げるが、協力者がないので上向に引繰り返すことが出来ない、これを見捨てて軽い金目の物を持ち出そうと土蔵に這入つて大切な軸物を探すが見当らない。自分では一かど落付いて居る積りだが、土蔵が壊れたら掘り出して

くれる者がないと云ふ不安もあつて、次に大切など思ふ軸物一抱持ち出して安全な場所に置いて、もう一度這入る積りで丹波屋敷に行つて見たが見張番がないので、極楽寺の山門を潜つて墓場の草の中に隠し、家に引返そうとすると境内には意外にも沢山の人が避難してゐる。家族の連中も此中に居るのではあるまいかと尋ねると、今迄女中さん方も大勢おられましたが山の方に上られましたと云ふ。山といへば山越しで薬師方面に行つたであらう。今ならば追いつくかも知れんと金毘羅山より行者山を越し薬師境内を探して見るが見当らない。松吸で料理人に出逢つたが、炊事場から一人逃げたから家族の方とは出逢いません、宿帳を出しませんで相済みませんでしたと詫びを言ふ。そうして鳥取迄帰りたいと思ひますから汽車賃を二円貸してくれと言ふ、仕方がないから八円持つてゐた金入から、今では貴重な二円を分与して別れた。

道中でも山を越す途中で主人を殺しました。家内

に死なれたと抱きついて泣いて訴へる人もあり、現金を出さなかつたと残念がる人にも出逢ふ。自分も大切な物を出さなかつたと言ふと、老婆の人であつた、本尊様や位牌をよう出されませんでしたかど気が毒がつてくれられた。之は後日の話であるが山本重吉君の家に行つて、バラック住居では碁盤を買つてゐる者もなからうが、一度碁を打つて見たいなあと話すと小さい聲で、あるから一石お願いしようと言つて出して來られたのが秘蔵上等の品である。傍で聞いてゐた妻君が此人は馬鹿だ、本宅（王橋詰いたやを借りて宿屋営業をし愛宕町に立派な別荘と土蔵を新築して間もなく震災に遇ふ）に來て軸物を帶で甘幅束ねてゐた中から三本抜いて、あとは何も持たずに愛宕町に帰り、山本屋の土蔵の消火に努めてそれは無事なるを得たが、四時頃弁天山小学校を焼いた火が遅く別荘に移り、土蔵も類焼すると見るや止めるのも聞かずに危険を犯して取り出したのが此碁盤一つであつた。まだ／＼取り出す大切な物が沢

山あつたのにと憤慨してゐられた。人思いく／＼で一番大切の品に相違があるのには苦笑を禁じ得なかつた。

火災は六軒町より八軒町に廻つて来て西尾別荘と鴻湯に火がうつると、今迄奥に吹いてゐた風は忽ち方向を変へて、再び下に向つて吹き出したのを見た時実に戦慄を覚えた。恰も八軒町も残りなく焼き尽したから引返して焼け残つた隅々まで焼き尽してやらねば置かないと呪はれてゐるのではあるまいかと。自分は他力本願の真宗の家に生れ然も父も母も兄も亦其信者であつたが、自分は小さい時から家を興すことに専念して、神仏を等閑に付することもなく、誠の道に違はなかつたらと最後の頼みとするは自分であると信じて来たが、今日の出来事を見ては天地の前には何んと人間の力の如何果なきものであるかをまぎ／＼と見せつけられた。そうして人間の力自分の力を過信した、そうして色々と過ちを犯して来たであらう其罪科の為にか、

る災厄を蒙つたのではあるまいか。今は為す事もないま、鴻湯上の滝田の埋立地の広場に来て見ると、拙宅の客人の顔も見へたので腰をおろして煙草に火をつけると、忽ち人が寄つて来て一本くれと哀願されて一箱は空となつて、今一箱リリーがあるが此次からは山中で一人喫ふことにした。

先に天地神仏に対し靈威を痛感した自分もやはり科學の囚はれ者の域を脱することは出来なかつた。

曾つて世界の地震學の大斗(泰)と称せられし大森博士の御來町を好機として町の幹部の人が泉源に関する意見を尋ねたそうだ。博士は泉源に異変を生ずる場合は筒形物(筒)が湧出口を閉塞するか、地震か乱掘に依るのであるが、当温泉は筒形物も少なく、町営だから乱掘の恐れもなく、且若狭・丹后(後)・但馬は古來地震には安全地帯であり、千二百有余年來湧いて變らなないのであるからまづ泉源に対しては現状より變らないと見てよからうと仰せられたそうだ。安田貞吉氏は地震の際、京都に於て痾を養つてゐられたそうだ

が、此話を直接博士の口から聞かれたのであり、科学を信ずること一倍に深く、同氏は城崎の地震を報じても、博士の言葉を妄信して絶対に城崎に起る筈はないと人の報告を受け容れなかつたそうだが、さもあつたであらうと想像される。

自分は眼前に此地震を見て居つてさへ、尚大森博士の言を信じて安全地帯である城崎さへ斯様の有様であるから、脆弱な大阪地方はどんなに成つてゐるであらうかと、半ば絶望的に大地にゴロツト仰向けに寝てゐると、午后一時か二時頃であつたであらうか飛行機の爆音が近づいて城崎の上空にあらはれた。

ア、飛行機が来たそうすれば地震は当地方のみであつたのか、然らばやがて救はれるのであらうと、其場に居つた者達は一齐に立ち上つて両手を高くさし上げて思はず歓呼を叫んだ。飛行機はそれに応ずるもの、如く城崎の上空を三べん旋回して、元来た南の空に姿を消した。此飛行機は大阪の朝日新聞のであつたそうだが、此時程飛行機を有難く頼母しく感

じたことはなかつた。

さて今頃は拙宅も燃へさかつてゐる頃であらう。地震にも堪へて、主家も別館も門も高塀さへ完全に倒れなかつたが、付近より迫る火の手を避けるすべもなく従容として類焼する健気な姿を主人にも見て貰いたいであらうと思はれて、行者山を越え金毘羅山の山頂に登つて見たが、山麓の寺町の燃える煙に遮断されて、拙宅の姿を望見出来得なかつたことはお互に残念に思つたことであつた。

独鈷水の前を通ると農具の物置小屋の前の草叢に老夫婦が俯伏してウン／＼苦悶しながら、お互に励まし合つてゐる。大方重傷を負つてゐる、であらう、見れば拙宅の浴衣と丹前を着てゐる、聲をかけようと思つたが施すすべもないま、通り過ぎてしまつた。

午后になると豊岡に通勤の人や中学生等大師山を越えて帰ってくる。一方猪飼口のトンネルをくゞる大胆な者があつたのに連れられて、終りには薬師公園

で遊んで居って地震に遇った幼稚園の園児まで、保母が引きつれてトンネルから下部に帰った程であった。

竹野方面は比較的被害が軽微であつたと見へて、汽笛を鳴らしながら汽車が徐行して来るを見て、城崎の下口及猪飼のトンネル口で避難者に乗せては鳥取方面に運んでくれるやうになつた。

(3) 地震の当夜と其翌日

薬師境内の避難者は浴客を交へて可なりの数に上つた。皆昼食は喫してゐなかつたが別段空腹を訴へなかつた。然し之等の人々に夕飯を与へねばならないと思ひ久保田新一君と相談して取敢へず、温泉寺より白米四俵借り入れて急造の窯で粥を炊いて供した。夕方になると養父郡の医師会により、応急診療班が薬師境内に来て、一順負傷者の手当に当たられた。それが終るのを待ち兼ねて、極楽寺境内にも負傷者のある事を告げて案内役を勤め、真先に昼間見た拙宅の客人の所へ行き、私はまんだらやの主人である

昼間より御負傷の有様を承知してゐましたが、施す、べもなきまま今迄でお捨て置きしてゐた失礼を詫び、只今お医者様を案内して参りました旨を述べると、其人は丹前や浴衣を拝借してゐるが、どうか今暫く許してくれと反対に謝罪せらるゝ。おかしな事と段々に聞いて見ると、私は旭屋門間広吉さんに滞在してゐた者であるが、お宅の着物を借りてゐるが今暫く借してくれと、恰も自分が其着物を取返しに来たものと感違いしてゐらるゝことが分つた。なんだ拙宅の客人ではなかつたのか、昼間から之が為にどんなに良心の呵責に苦しんだことだ、との腹立たしさと安神とであとの経過も見ずに早々に薬師境内に引返した。

日中は熱さに苦しんだが夜ともなると冷寒を覺へて、一同と共に焼け残りの材木を拾ひ集めて焚火に暖をとつた。午後八時頃か、津たやの叔父が客人を余部鉄橋に案内をして今帰つたが、拙宅は、そうして家族はどうしているかと尋ねらるゝが、津たやは建つ

てゐたと云う人もあるし、倒れてゐたと言ふ人もあつて明瞭を欠くし、今におしづさんにも初枝にも逢はないところを見ると、最悪の場合を覚悟せねばならん。自分も家族の者は無事に女中達と共に逃げたそうだが、何所に行ったのか今に午後の消息は分らないが、其中におしづさんや初枝の居つたらしい話も聞かなかつたが、今は夜明けを待つより致方がないと話して、共に焚火にあたつて夜を明かすことにした。

午後八時九時十時と神戸絹業博覧会行の盆踊の連中が一人二人と帰つて来る、留居中、夫が妻が愛児等が惨死された人もあるであらうが、帰りの車中に於ける焦燥と心痛は実にどんなであつたであらうと、心から同情に堪へられない。時々陳屋山の山越しに火の手のあがるのは大方土蔵の焼け落ちる火災であらう。

廿四日未明に薬師境内を出て六軒町木福屋の角を曲ると、遠く下部の方まで一面の焼野原で、植木や電

柱の焼け残つてゐるものが所々ある丈で、眼を遮切る何物もないのには実に其意外であるのには驚いた。道路の所々に黒焼けになつた木像のやうな死体が転つてゐるし、臭気は芬々として鼻をつくが恐ろしいとも嫌な臭ひとも感じないで、只よく隅々まで焼けたものだとつくづく驚嘆する計りである。道々家内に死なれたと泣いて訴へる人があがるが慰める言葉もない。今津の三本松のあたりまで灰を踏んで行つて見たが、家族に出逢はないので行違ひではないかと拙宅の屋敷跡に返つて見ると、そこにおたつが弘を負ふて栄一郎と孝雄を連れて、焼跡を眺めながらシヨンポリ立つてゐる。昨朝別れてから僅廿余時間より経過してゐないのに、大変な時間の様な心持がするし、其間には祖先より享け継いでそれに二人が十数年間苦心と努力を重ねた家も財産も悉く烏有に帰して、そこに残るのは焼土と化した屋敷跡のみである。今日から何処に寝るのであらうか、明日からはどうして食ふのであらうか、山頂から谷底へ突

落された悪夢に襲はれたやうな心地がする。然しながら家内中無事で再会出来得たことは、此際に於ける最大の倖せであり感激である。お互に無事であった喜びも今は着のみ着のまゝになつた悲しみも、たゞ涙含むそれ丈で二人の心は相通ずるのであつた。

出石の義兄は中村栄造さんと早々に見舞に来てくれた。変りはてた拙宅の有様を見て泣いてくれるがどうしたのかチツトも涙もこぼれない。屋敷の真中に金庫が転がつてゐる。義兄は早く開けて見よと言ふが、金庫は竹内製で上等であるが一昼夜五十余坪の三階建の真中で、火の中にあつた五号の小さい金庫が無事である氣遣ひはない。玉手箱ではないが開かぬ方が楽しみであると考えてゐたが、それでもと勤めるまゝに焼けたバケツで水を汲んで、道中の火を消しながら近づくと、何処の消防組か七八人自分で手を貸して周囲の火を消し、金庫を仰向にして蔭口で蝶番を叩き毀さんとするがピクともせない。駄

目だと思つたが文字板を廻すと廻る／＼。符合を合せて、力一ぱい引明けると中の桐の木は黒く色づいてゐるが大丈夫らしい、手早く中の品を引出して水で湿りを与へた。貨幣は無事であり金時計も機械は破損してゐるが、側も鎖も大丈夫であり、紙幣書類さへ茶褐色⑤に色づいてゐるが文字も読める。今の身にとつては大変な財産である。昨日持ち出した軸物と共に義兄に託し、おたつや子供達も一時出石に預つて貰ふことゝした。

家に居つた連中は氣持の悪い大音響と共に、家が搖れて立上れなかつたが、それでもどうして出たのか兎に角表道路にとび出して見ると、向の伊豆屋は建つてゐたが、まんだら湯も植村も（川を隔て、北隣）古まんだらやも無慘に倒壊してゐるので、初めて家の倒れる地震であつたことに氣がついたようだ。まんだら湯からは丸裸で出て来る客人もあり、血みどろになつて這い出して来る人もある。おたつが何か着る物を貸してあげたいと言ふと、お松と呼ぶ女

中が家に駆け込んで丹前と浴衣を一抱へ持出して来たから、裸の客人に夫々分け与へ、女中達にお前達の着物を出してこいと言っても、皆出そうとする者は一人もない。植村さんのお神さんが主人が下敷と成つてゐるから助けて下さいと、泣いて頼まれるが女ばかりで何の役にもたたず、通る男の人に依頼しても皆聞き捨てにして、救助してあげやうといふ人もない。古まんだらやの叔母さん（よね）も下敷になつてゐられるが、梁に挟まってどんなにしても救へないと言つてゐらるゝそうだ。咄嗟に大蒲団二、三枚と敷蒲団一枚持ち出したものの、あとは物を取出すうなどとは考へられない位、周囲の情況は凄惨を極めて居つたし、ほんのお互に様子の知れ合つたのは隣家と通つた処丈けであつて、まんだら町も植村と古まんだらやの外は望見出来なかつたそうだが、県道筋山本文蔵氏あたり早くも煙が上り出して火炎さへ見へるので、女の客人にせがまるゝま、極楽寺に立退いたが、此所でも火に迫られたら安全でない

から汽車の沿線まで連れて逃げてくれ、今はお神様が唯一の頼みだからと責められるので、此処にも居た、まるで女中四人子守一人で代るゝ弘を背負い、極楽寺茶堂に登り道なき所を迂り下りて観音浦に出ると、花屋の家族に連れられた孝雄に逢ひ津浪襲来の憂れがあるからと聞かせられて、とう／＼上山村の県道ぶちポンプ小屋に落付き、豊岡より帰らんとする栄一郎を呼び止めて夜を明したそうだ。

津たやは第一震と同時に階下は圧倒されておしづさんも初枝も即死を遂げたらしい。常にゐた奥側の室のあたりで遺骨を発見したし、二階三階は僅に建つてゐたと見へて女中はそこから無事に逃げて居つた。此地震は東より西に搖れて六軒町より王橋までの県道の西側及び大溪川の西側、殊に地藏湯付近の地盤の脆弱なる所の建物は殆んど言つてよい程倒壊したし、面白いのは板屋の四階建は隣を押して将棋倒しにした反動で倒壊を免れてゐたそうだし、松ヶ崎、みどりの横通り、八軒町等東西に建てられた通りの

建物は比較的安全で残った家が沢山あった。(以下、当時の松太郎家族、旅館滞在客人省略)

(4) 震災横死者の葬式

余儘未だ冷めやらぬ廿四日の早朝から廿五日にかけて焼けた屋敷跡に家族の遺骨を掘り捜す哀れな姿が此所彼所に見受けられる。極楽寺の客僧は墨染の法衣に草鞋履きで鐘を叩いて、それ等の精霊に会向して廻つてゐらるゝ姿は、慘憺たる情景と共に一種の悽愴たる尊しさである。

遺骨を葬ると云つても、僧侶の読経を載くでもなく焼けたバケツに入れて近親者が付き添つて、墓場に埋没して手を合せて冥福を祈る丈けである。

四所神社の山中に逃げ遅れて火に包まれて横死を遂げてゐた人も数人ある。多分負傷して山を越し得なかつたであろう。此山から桃島又は鴻湯に逃げた人もあり、一の湯の裏山から桃島のスキー場(スキー場は震災后設置されたもの)方面に避難した人は非常に多数であつたそつだ。

人間の必死の力は驚くべきものがある。亀屋垣谷直助氏は足の三里の骨が折れたそうであるが、其足を首に吊つて此山を膝行して越されたそうだが、避難の人はボツ／＼越しなさいと勇氣付けてくれるが、誰一人助けてくれようとする人もなく先に行つてしまふ。後からは烟が追いかけてくる。もう駄目だといへん思つたかも知れなかつたが、追ふてくる烟によりも下り坂の苦勞が大変であつたと話された。細田勇次君は中の町で負傷し我家に帰るを得ず、四所神社裏の横穴に這ひ込み、神社の炎上の際は水をかぶつて、漸やく九死に一生を得て夜を明したそうだ。道路に横死を遂げられた客人等の死体は、一時極楽寺にて納棺して祭り、尋ねて来た遺族の人に夫々交付された。

(5) 地震に活躍した人々

地震に際し、財産の多くある人や、大家族を擁した人達は、我家の事に没頭して勇敢に活躍出来ぬもの

である。殊に家族の内に遭難者のあつた場合は又格別である。第一震で無意識にとび出して、あとに子供を残して置いたが、引続く余震に恐怖して、再び連れ出しに飛び込む勇氣のなくなつたと言ふ人もあり、夫が一人飛び出して連れ出そうとしてくれなかつた夫に、其無情を怒る妻があつたり、茫然としてゐる男にシツカリせよと勇氣付けてやると、やには家に飛び込んで持ち出したのが、入りもしない壺であつたといふやうな笑い話もあつた。

或家は梁に片腕挟まれた妻を救出せんと、梃こぎで持ち上げて見たり、鋸で切つて見たりするが、何分三階建が上から覆圧してゐるので意にまかせず、火の迫るまゝに水を与へ因果を含ませて立退いたといふ人もあり、両足を梁に挟まれて其の苦痛に堪へられないで、一思いに殺してくれとせがまれ、出来ないのならば刀物を貸してくれと号泣するを、遂に見捨て、立退いたといふ悲惨な話も珍しくはなかつた。あみや樋口七太郎氏は圧死した妻も店員に協力させ

て、家の下から取り出し其死体を戸板に載せて、店員と共に火が迫れば他に異動して夜を明されたものである。

うをや杉本繁蔵氏は外出先から駆け戻つて見ると、主家も裏座敷も倒壊してゐる。家族の居るであらう場所を大聲で呼んで見るが、少しの答へる聲も聞えない。若い男女の客が情死の書置きを所持したのを発見して、警察に届出て置いたが、裏座敷の下から微かに助けを呼ぶ聲がきこえる。死にたい者が助けを呼ぶとは笑はせる。何れにしても一人の力では如何とも致方がないから、此上は一人の力で及ぶ救助に努めんと、或は一人で又は人に助力して十四人救出されたそうだ。町長の推申によりて、将官級に非ざれば授与されないと云ふ功労章下賜の特典に浴されたが、横死された義母及妻君の近親者は、力及ばなくとも今少し家族の先途を見届けてほしかった。と不満の情を漏してゐられたそうだが、樋口氏と果して何れを選ぶべきが是であらうか。

財産及大家族を擁した人の他を顧みる余裕のなかつた反対に、他所より入り込んでゐた人の而も一人身であるとか、二階借りの行李一個が全財産である一人身の人等は、屋根を破つて人を助け出したり、負傷した人を背負い、倒壊した屋根の上を越して避難させたり、公用の重要書類を火災の中より運び出したといふやうな人、町長の側を離れず町長の手足となつて活躍した人等もあつて、后日町長が其功勞を県に進達されたが、そう云ふ人の常として賭博の常習者であつたり、前科者、不頼の徒であつて、県庁より国家より恩典表彰に預られなかつたことは、一面氣の毒に感じられた。

地震の翌日から焼土に立つて焼死者の靈に對し、一々会向して廻られた極樂寺に偶々草鞋をぬいであられた旅僧も、此僧侶が先登になつて消火に挺身された為に力を得て付近の人が協力した為に、極樂寺の借地に建つてゐた福田屋の土蔵、山本文藏氏の持家（今の樋口七太郎氏の物置の所）及竹屋の一劃が

焼け残つたのであるが、此奇特なる功を徳として県庁の調査員に推奨したが、取調べの結果従來の行動に面白からざる所があつたさうで、遂に表彰に預られなかつた。

(6) 死傷者のなかつた倅合せ

人は自分の土地自分の家で死去した家族に對しては、其死にやうの如何に抱らず諦めのつくものであるが、入湯の旅先で不慮の横死を遂げられた其家族の人に取つては、実に諦められないものがあるであらう。

同時に倒れないで無事に立退かれた旅館もあるのに、倒壊した為に死に至らしめた旅館主に取つては、家族が死亡したよりも以上に心身に苦痛を感じるものである。

旭屋の客人を拙宅の客と誤認して重傷を負はれた老夫婦を、半日見すて、置いたことに於てさへ自責に身の細る思いがした。何と云つても拙宅が倒壊せなかつて一人の負傷者も出さなかつたことは大なる歓喜であつた。

翌日又は翌々日からは客人の安否を尋ねて近親の方が来られたが、其方でしたら今津村にて夜を明して今朝拙宅を訪れて立帰られました三人組の老婆の方々でした。其方は鴻湯の広場で逢ひまして負傷も何もしてゐられませんでした。御出発の時間は知りませんが大丈夫帰宅なさったでせう。と答へ得た有難さは実に何んとも言へない嬉しさと誇りをさへ持たれるのであった。

美濃関町の武藤源吉さんと言ふ立派な紳士が尋ねて来られた。ハイ其奥様は大変美しい方でして、五、六歳の可愛い、お嬢様をお連れでした。隣室の京都のお客様が一緒に家から出たと申して居られましたし、昨日の午后汽車に乗って出発したと、駅長さんらに伝言を頼んで置かれましたそうで、駅長さんから知らせがありましたから御安神願ごごころねがひって大丈夫だと存じますと答へると、其御主人は大変喜んで庭園にお嬢さんの着物の焼け残りがあつたのを発見して、記念にと其端を持つて帰られたが、嬉しかったと見へて

宿料にと四十円の大金を郵送して来られた。

死者を出された家ではどう云つて遺族の方々にお詫びしてゐられるであらうと気の毒に感じられた。然し客人の中でも無情の人もあつた。廿四日の早朝焼け跡で、着のみ着のま、茫然としてゐる自分をつかまへて、預けて置いたお金を今返せと催促に来た老婆もあつたし、丹前を着て荷物を全部持つて出られたことを目撃したといふ人が、或る用件で翌朝訪ねて来て帰宅したら、丹前を送り返すと言いながら返送してくれなかつた人もあつた。

当座は家族の死傷より客人の死傷の方がより苦痛を感じるものである。家族や客人の死傷せられた家は心身の打撃はどんなであらうか、其の点大なる俾合せであつたことを、祖先にも神仏にも心から感謝を捧げたことであつた。

拙宅の地相も家相も易者に言はしむれば凶相であると言ふであらう。然しながら震源地の圈内であつて、版ばん困こまこそ極めて狭小であつたが、其震度は非常に強

烈であつたと言はれてゐる大地震にも倒壊せなかつたことから見て、再び城崎が震源地であつた場合も、倒壊は免れるであらうことは断言して誤ちでないのである。此点子孫安神して可なりであるとの確言は大森博士の予言よりの確である。

(7) 地震見舞の来訪と見舞品贈与

廿四日は芦谷村の木炭を毎日背負つて持つて来てくれた、井垣おうめさんの主人が握飯を一重持つて見舞に来てくれたので、甘味アマしい昼飯を鳥谷の叔父達と共に分け合つて喫した。同じく炭屋の鬼神谷の橋鉄次郎さんも、むずびの漬物を持つて見舞に来てくれたし、鳥谷兼吉氏は乾パン、缶詰、其他当座入用であらう品々をリユークサックに入れて、鳥谷の叔父と共に廿五日来町慰めてくれた。たしか令兄の川崎保三氏と共に来てくれたと思ふ。其他拙宅のみ、又は各種の代表者として町に見舞に來られたついでに、見舞の金品を送与贈してくれられた方々も多数あつたから左に記して置く。

廿五日の夜下宿の佐藤佐太郎氏に伴はれて克巳が帰つて來た。おたつや子供は出石に行つてゐたから自分一人で薬師の山門で会つたが、しく／＼泣いてゐた。今帰つてくれても見るやうな次第で、居る所もなく何等手伝つて貰ふ仕事もないから、お前は今夜引返して京都へ歸つて佐藤様に御厄介になつて居つてくれ、可愛そうだが此学期で退学してくれなくては到底お前の学資を送る資力もなくなつたから、残る所は僅二ヶ月だが其二ヶ月の間しっかり勉強してくれ、と茶を一杯飲ませる用意もなきまゝ、立てり話して夜行で京都へ出發させた。

〔見舞の一覽表省略〕

(8) 震災直後と天理教のテント内生活

おたつ及子供達を出石に送つたあとは僅に取出されてゐた蒲団を持つては、他人の建てた急造堀建小屋に泊めて貰ふのも氣兼ねであると言つて、自分では小屋を建てる才能がないので、危険で誰も這入つてゐない金毘羅教会所に、鳥谷の叔父と二人で三日目の

晩から寝泊りをすることにした。

廿八日の夜中であつたか、震災后一番烈しかったと言ふ余震が来て、障子の子骨を破つて飛び出したこともあつた。月末頃になつて天理教会所の前の空地に、天理教本部の急援の大テントが張られて、小屋掛を持たない十数世帯がそれに容れて貰ふことになつたから、おたつを呼び戻して移り住むことにした。

西村町長は村上助役其他少数の吏員を督励して、寝食を忘れて応急処置と来訪の応接其他に狂奔して、疲労も甚しく且地震直后から、大聲疾呼してゐる、から聲もかかれて出ない。此有様を見た西村彦七氏は町長を殺すのか、と有志に応援協力を勧説せられてゐるとか聞いてゐるが、それを聞くまでもなくよく気はついてゐるが、見舞に来てくれられる人が毎日引きも切らない有様で自由もきかず、やつと鳥谷の叔父に留守を頼んで駅前^の仮役場に出勤はするが不都合で進退の自由が意の如くにならない折柄、テントに収容して貰へることになつたから実にうれ

しかった。

出石に避難したおたつや子供達は寝食に困らないのであるから結構なことであらうと想像してゐたのに、周囲の人は皆家で営業を持つてゐらるゝに反し、着のみ着のま、此先如何なる境遇、如何なる運命に逢著するのやら見通しのつかない身にあつては、どんなに同情を寄せて貰つても少しの慰めとはならないで、やはり同じ運命の人と共に苦しみ共に泣きたくつて、早く帰りたいと少しの落付もなかつたと言ふ。豊岡に通学する関係で栄一郎を連れ、弘を背負つて帰つて来たが、孝雄は大人や子供から親切に、大切にして貰へば貰ふ程悲しそうにしてゐたが、四人連れで遙に來日の山を眺めては故郷を懐かしんでゐたが、今日からは一人残されてどうしてゐるであらうかと可愛そうでならないと言ふ。

今日からは誰に遠慮もなく危険も感じない住家が出来たので皆大変なはしやぎやうである。床には近所にあつた柴木のニューを毀して其束なりを並べ、其

上に毛布と蒲団を敷いてゐるから少々背中が痛い、それにも増して寝心地がよい。実に安楽浄土の感がある。自分は専門に役場勤めが出来るやうになつたし、おたつは見舞客の応接と暇さへあれば屋敷跡で銅や茶碗、皿掘りで一生懸命である。然し此の極楽浄土とも思へたテント生活も、日が経つに連れて次第に住心地が厭はしくなりまさつていった。

何分二十世帯近く一つのテントに相住居して、それがなす事もなく毎日日を送つてゐるのだから、毎晩遅くまで愚痴をこぼす女もあり、甚しきは十二時近くまで酒を飲んで管を巻く男もあつたりして、復興事務に終日疲れて安息の住家に帰つて来ても、就眠も心の慰安もとれない。留守居の連中も日中は暑くてテントの中に居られないし、役場に対する不平、小言を言ふから聞きづらいと云ふ。それで殆んど屋敷跡に行つて赤金掘をしてゐるそうだ。やはり恒心のない連中は度し難いものである。

(9) 県営住宅

六月頃に県営のバラックが落成した。中部から上は鴻湯前の広場八軒町川向の西尾屋敷、及まんだら湯西の滝田の所有地に建てられて、そこに収容された。下部は学校前の広場、駅より三本松線路沿い及今津と東山公園下に建てられたバラックに収容された。愈々今日からは誰に遠慮気兼ねのない住宅が、一戸づつ割当られたのであるから嬉しくてたまらない。四方板で仕切つた九尺に十二尺の一室であるが、それが金殿玉楼とも思へ一国一城の主となつた心持ちもして、各室からも頻りに朗かな歓声が揚つてくる。

京都の客人今西幸太郎さんが、慰問袋を集めてわざわざ来訪せられ、豊岡へ引返して泊ると言はれた時間も引留めてお泊めしたい位、立派とは言へないが寝られないと言ふ程、見苦しい住居とは思つてゐなかつたのである。然し人間も慣れてくると次第に贅沢にはなり易いものである。

移住早々はお客様までお泊めして誇らしく感じて居つたバラックも、テントの時と同様に此所も安住の

地ではなかった。古まんだらやは川向の畑に小屋掛を造つてゐられたが、此所に半数住んで見られたもの、やはり独立の小屋掛の気楽さに早々に引あげられたので、拙宅はそこ二室併用し、然も一番西の端で隣との交渉も少なかったが、中間にゐる人は一枚を隔て、直接三軒に隣し、前は一間半程の道路を隔て、向の長屋に相對してゐるから、息詰る想いがするそうである。

そう云ふ背中合せに十軒住んでゐるバラックが、七棟建てられて居つて便所や水道は共用であるから、近所の監視が厳しくつて、あの家は魚を買つたことがない、ある家は今日は夫婦喧嘩をしたと噂にのるから、集団生活もなか／＼堪へられない苦労がある。尚役場及幹部に対する非難攻撃が相当烈しくつて、拙宅にあつてつて言ふのではないが、聞きづらくてかなはないと家内は言ふし、寝てからあなたが居らなかつたから子供を殺した、荷物を出さなかつた、配給や慰問袋が下部より少い、義捐金を分配せず

町の事業に使用する等々、毎夜のやうに聞えてくるから安眠も出来難いし、近所に遊びに行こうと思ふ家もない、やはり仮住宅を建設すると言ふ余力を持つてゐる者の気儘であらうか。

(10) 震災横死者の慰霊祭

六月廿三日薬師公園の奥で盛大なる追悼会が挙行され、天龍寺の管長関青拙禅師道師となり、当町及広く城崎郡の寺院の僧侶も参会された。

神戸市直木政之助氏は城崎温泉の愛好者で、前の服部知事及神戸市の知名の士と相計つて、北但地震に横死した霊を慰める為、供養塔建設を計画し、広く建設費を募集して、此所に建設すべく地を選んで城崎町と共に慰霊祭を挙行されたのである。

今の供養塔がそれであつて、後に竣工してからも盛大なる落成供養が催されたが、城崎町では以後十年祭までは毎年五月廿三日に祭壇を設け、テントを張つて盛大なる追悼会が催された。

死去に當つては近親者のみで寂しく葬られた霊も、

今日の喜ばれたことであらう。津たやでも掘出した焼残りの茶碗や皿ではあったが、それに御馳走を盛り親族も招待してバラック内で仏事供養を営まれた。

(11) 仮住宅落成

七月になると漸やく元屋敷の一隅に仮住居が落成した。後に物入に使用する計画で、材料は粗末であるが六畳に四畳半の二階建てで、それに平屋の押入、便所及玄關兼炊事場が取付けてあって、瓦なしで八百円の巨費を投じたものである。

お粗末ではあるが畳も敷き詰めてあり障子も襖もあって、初めて人間の家に住んだ心持がした。庭木は全部焼けてゐるがそれでも焼けた株から芽をふいて、^も籾木などは元氣よく二尺位も伸上つてゐる。無情の木々でさえ我々より早く復興の営みを開始してゐる、雄々しい姿を見て眼頭が熱くなるのを覚へた。

一茶であつたならば

焼け木の芽 伸び伸び天に とどくまで

と激励したことであらう。出石に残されてどんなに

可愛いがられても夕方になると、来日の峰を眺めて寂しそうにしてゐた孝雄も帰つて来て家の中を、屋敷跡を飛び廻つてゐる。何と云つても近所の監視を受けないことは住みよいことである。

御所の湯は立派なバラック建てであるが、近所の人も野天風呂のまんだら湯に入浴して、御所の湯に行こうともせない。青天井の浴場も実に爽快なものである。後に、之にテントを張つたが、雨の日も雪が降るやうになつた冬期間でも、此所に入浴を続けた津たやの叔父も二階に移つて来たが、暫くすると自分の家も竣工したのでそれに移転して行つた。今日は家移りと言ふので小豆飯を炊いて心ばかりの御祝いをした。

(12) 赤金堀り

おたつは天理教のテントにゐた頃から、毎日弘を背負つたり遊ばせなどして赤金堀りが仕事であり、栄一郎も学校を帰ると之を手伝つた。どこの子供も小学校から帰ると毎日赤金堀りが仕事であつた。今日

は十五錢儲けた、今日は二十錢儲けたと言つて赤金
 買いに売却したり、鉛売に鉛と換へたりしてゐる。
 それが我屋敷ばかりでなく何所の屋敷跡でもおかま
 いなしに拾い歩く。

ゆとうやのお嬢ちゃんも其仲間に這入つてゐられる
 ので、出入りの者が主人に注意しに行つたと云ふ話
 もあつて、子供達の心根も荒々しくなつてゐたし、
 又赤金買や鉛売が子供達を使^し使^はしたのに因るのでも
 あつた。

又水平社の女達が草履売を名目にして、草履を片手
 に提げて毎日赤金を拾いに来る。追つても叱つても
 なかなか立退こうともしない。

拙宅は専門家の鳥谷の叔父が相場表を持つて居つて
 高価に売り捌いてくれて、三百六十円の驚異的收入
 を得たが、大抵の人は涙錢位の廉価で取られてしま
 った。

或日役場に行きがけに鶴鳴楼の前を通りが、ると、
 主人樋口鶴吉氏が掘り出した金物を売らうとしてゐ

らるる、見ると赤金買は此通り斤量は持つてゐます
 が、途中で錘を落したから目分量で貰ひます。大変
 な災難に遭はれましたのであるから、値段は精々高
 く買はして頂きます、と言ふ甘言に目方も単価も一
 切買ひ手に委せて、三分の一にも足りない代金で買
 い取られようとしてゐらる、から、之を見た自分は
 一寸待て、人の災難に乗じて金儲けをしようとする
 鬼畜のやうな行為は断じて許すべからざる奴輩だと、
 謝罪する商人の胸ぐらを引摺んで、地藏湯前の警官
 屯所まで連行して、城崎から追放してやつたと言ふ
 こともあつた。金儲けの為には手段を選ばない莫義
 道輩も当時でも可なり多くゐたものである。

震災から二十日も過ぎた頃である。まんだら湯の西
 高屋敷のバラックに住んでゐる連中が、拙宅の土蔵
 のあたりに夜な／＼青い火が燃え上るのを見る、今
 に火の気があるとも思へないし、お宅には死んだ人
 がないのに不思議なことであると云ふ。気のせいでは
 ないかと言つても見た者が大勢ゐると云ふので、

土蔵の壁土を掘り返して見ると、未だ底の方は可なり熱を持ってゐて、そこに未だ使用せないうで保存してあつた銅板が二十枚程あつたのは意外であつた。雨も降つたし廿日にもなつてゐるのに、銅板が焼けて炎を上げてゐたのには驚愕させられた。

(13) 救援物資と慰問袋

地震と同時に全国からの同情が欣然と集り、県庁又は新聞社を通じて、或は個人又は組合、会社の代表者などが直接町役場に金品を持参して、見舞はれる人が曳きも切らない有様であつた。一つは関東大地震が十二年にあつて、幾ばくも間がなかつたことにも困つたのであらう。

兵庫県庁からも県費で又は集まつた義損金で、救援応急物資を購入して急送されたが為に、我々は大した饑餓にも瀬せず必要物資は次から次に配給されて、最低の生活が営めたことは実に感謝の外はなかつた。

然し人間の欲には限りのないものである。北但地震

は城崎の名に於て多くの品が送られたのであるが、豊岡町に郡役所があり県の急援本部が置かれた關係上多く豊岡駅に荷物が下されて、配給物資も豊岡町に多く、不便な土地程恵まれなかつたことは是非もない次第であるが、不快に感ずることを禁じ得なかつた。

城崎町に於ても到著物資を上部の方は早く知る方法がなかつた為に、何時も下部の方に取られ勝ちで損な立場にあつた。慰問袋は京都、大阪、神戸の如き特殊關係の土地は兎に角、未だ復興ならざる東京、横浜等の震災地から多かつたのは大いに感謝された。東京市の如きは直ちに医療救護班を派遣して傷病者の施療に当り、帰るに及んでは医療器具、医薬等一切当町の医師会に寄贈せられたことは肝銘を深くした。

慰問袋も可なり多数の配分をうけた。地方によりて上等の物もあり大小もあり、之が配分に當つて戸数割人数割の論議があつたり、数の少ない品物の配分

等無料に貰ふ物であっても恨み悔みがあつて、理解のある者、道を重ざる者は常に損の立場にあつたが、仏様や道義者のやうな大乘的でなくして、人間的賞罰を与へる方法がないものかと、度々考へさせられたことがあつた。

子供達は大人のやうな不逞さはなく、私がよい籤を引いてあげると、慰問袋の配給を楽しんで母について行つた。そうして上等の品を引あてた時は、それが子供達に不用の品であつても家の為になると喜んだ。

或日孝雄が学校戻りに元気よく走せ帰つて、今日は良い蒲団が貰へたのであらうと云ふ、拙宅は一軒家であるから世間の様子は少しも分らないから、何も貰はなかつたとおたつが答へると淋しい顔をして、しよげ込んでしまった。大方帰る途中で上等の蒲団を分け合つて喜んでゐる有様を見て帰つたのであらう。

私の家の蒲団と言へば持ち出した蒲団が三、四枚の

外は、慰問袋の手拭を継ぎ合せた裏であり、敷布であり、表は着物の古い物や貰い物の古表であつて、一枚くゞ違つた見苦しい物ばかりである。今日見た蒲団は綿こそ悪かつたであらうが、茶縞の柄行もよし裏も木綿金巾がついてゐたから上等に見へたのも当然である。

今日の蒲団は県税廿円以下の階級に配分されたのであるが、以上の家であつても以前は兎に角今では自分の家も貧乏人同然であると、聊か不満を感じる位であるから、子供には定めし悲しい思いが致すであらう。

子供の心も察しられて今日貰つた家は皆貧乏の家ばかりである。拙宅は金持ちであるから貰はなかつたのだと孝雄の心を引きたて、やつたが、元の元氣には戻らなかつた。其晩は皆蒲団の話には触れなかつたが何んとなく佗しい心持ちで寝についた。

〔恒産と恒心、赤誠会、貸借の整理、克巳の教育問題を省略〕

(14) バラックに於ける生活

宿屋業に於ける家族の副食物は客に供する材料で賄ふを常としたから、特に家族の副食物として購入する場合は勿体ないやうな気分がした。そう言ふ習慣性がある上におたつは儉約を旨としたから、震災後は芋と玉葱の連続であつて、偶々魚を買ふといへば十銭の鰯で家内中に分け合い、最も下級のグベとかゴンボと称する魚を塩干にして食べさせたから、遂には其姿に嫌悪を感ずるやうになつて今に其習性が残つてゐる。

そう云ふ生活情態であつたから客人が見舞に來られて昼前ともなると、お食事をといふ何事の用意もないので焦燥を感じた。

自分はそう云ふ場面には留守勝で一、二回より遇はなかつたが、おたつは一人留守番をして居つて話相手にもなつて居らねばならんし、一寸御昼を差し上げる用意をいたしますからと、お客様を一人置いておく訳にも行かず、といつて用意しようにも何等材

料がある訳でもなく、客人もそう云ふ積りではないがあまり変りはてたる有様を見て、同情の余り話が長くなるのである。

駅前には早くより飲食店が開業したが、上部の方はトロッコのレールが道の中央に敷かれて居つて、雨でも降ると長靴でなければ泥濘で歩行も自由ならぬ有様で、従つて需要もない關係で一軒の煮売店もない。漸やく七月頃から立岡が細々ながら洋食店を開業してくれたので大に助かつた。

〔無一物無尺蔵、一家無事である歎びと復興プランの項省略〕

第二節 浴場と旅館の変遷

1 湯槽（外湯）の変遷

三、明治十四年五月「城崎温泉雜誌」

（三宅竹隱著）

○浴槽の位置（六湯、十四槽）

温泉ノ始メテ湧出セシハ、元正天皇養老四年ニシテ今ニ至リ千百六拾余年ナリ。其間世ニ知レザリシニ近世後藤良山、香川太冲ナドノ名医ノ書ヲ著ハセシヨリ、世人皆其功用アルヲ知ルト雖モ、其原質ノ微細ニ至リテハ之ヲ知ルノ術ナカリシニ、近來化学大ニ開ケシニヨリ温泉モ屢分析スレドモ未ダ精密ナラズ。今示ス所ハ大阪司薬場教師（ベドワルス氏）ノ分析スルモノ也。（省略）但シ此地ニ来リテ作セシニ非ズ故ニ是亦精密ナラズ。

○浴槽総テ十四アリ、其中浴客ノ最モ群聚スル者ヲ一

ノ湯、二ノ湯、御所ノ湯、曼陀羅湯ト云フ。其外家具等洗滌ノ為メニ小槽ヲ設ケシ所モ多シ。大抵深ク地中ヲ掘レバ何処ニテモ湧出ルナリ。近日（明治十三年十一月）水ヲ取ランガ為メニ堀抜井戸ヲ為セシ事三ヶ所ナリシニ、孰レモ皆温泉バカリナリ奇妙ト謂ベシ。以上ノ湯槽皆其原質差異ナシ。今示ス分析表ハ浴客ノ多キ湯バカリナリ。

◇一ノ湯、二ノ湯

二槽トモ泉源同ジクシテ最モ効驗アリ、誠ニ清潔ニシテ玲瓏晶瑩ナリ。後藤・香川両先生之ヲ天下無雙ノ良湯ト云フ。是ヲ以テ今ニ至リ此二槽浴客殊ニ群衆ス。兩槽一日代リニ幕湯トナス。浴客尤モ多キ時ハ宵ノ間二時間、一ノ湯ヲ男、二ノ湯ヲ女ト區別ス。

◇新湯、三ノ湯、瘡湯

三槽列シテ二ノ湯ノ次ニ在リ、皆水脈ノ混ジルニヨリ温度甚ダ低ク硫黄臭クシテ少シ白ク濁レリ。然シ天氣ノ模様ニテ熱キ時アリ、香川・後藤氏ノ説ニ此瘡湯ニ浴スルヲ害アリトシテ、浴法四禁ノ一トシ厳シク禁ゼ